2002年度　中国青年招へい事業

「青年海外協力隊
日本語教師招へい計画」

参加者報告書

JICA LIBRARY
J1171789[9]

2003年3月

国際協力事業団中国事務所

CNO
JR
02－07

2002年度　中国青年招へい事業
「青年海外日本語教師招聘計画」
参加者報告書
2003年3月31日

編集・発行
国際協力事業団中国事務所
100004　北京市東三環北路5号
北京発展大厦1111号室
(TEL) 0086－10－6590－9250
(FAX) 0086－10－6590－9260

無断転載を禁ず。

2002年度青年招へい事業

「青年海外協力隊
日本語教師招へい計画」

参加者報告書

目　　次

1．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

2．写　真　編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

3．参加青年一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

4．招へい日程表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

5．参加者報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

1171789〔9〕

＊この報告書は招へい参加者の意向を尊重し、一部固有名詞などの誤謬を除き、原則として原文のまま掲載しています。

はじめに

2002年は日中国交正常化30周年の記念すべき年であり、また当事業団中国事務所開設20周年の年でもありました。中国における20年の当事業団の活動の中で、青年海外協力隊事業は1986年に隊員4名の赴任によりスタートしました。それから17年、2003年3月現在、累計491名の青年海外協力隊員が派遣され（現在活動中の隊員74名）、そのうち日本語教師隊員は225名と半数近くを占めています。

この日本語教師隊員たちが活動する中国各地の学校には、隊員を受け入れ、隊員と共に日本語教育に携わる中国人日本語教師の方々が数多くおられます。その多くは、日本が好きで日本語を学び、そして現在日本語を生涯の仕事として選び、情熱を持って日本語を教えている方々です。

「青年海外協力隊日本語教師招聘計画」は、この日中両国の相互理解の掛け橋となっている方々に、実際に日本へ行って生の日本を経験し、日本と日本人をより深く理解していただくとともに、日本国内の新しい日本語教育法を学び、それを中国での日本語教育に生かしてもらうことを目指して、2002年度「青年招へい事業」の一環として初めて実現したものです。「青年招へい事業」は、国際協力事業団（JICA）が発展途上国を対象に実施する技術協力の一形態として、将来の国づくりを担う青年を専門分野別に約3週間日本へ招聘し、それぞれの分野について学ぶとともに、ホームステイ受入家族などとの幅広い交流を通じて相互理解を深め、信頼と友情を築くことを目的としています。

この報告書は2002年度の「青年海外協力隊日本語教師招聘計画」に参加した20名全員の参加報告書を集めたものです。「百聞は一見に如かず」。初めての日本で、それまで学び、教えてきた日本と現実の日本との共通点と微妙な差異とに戸惑い、ホームステイで受けた親切に感銘し、日本の先生や子供たちとの交流に胸弾ませながら過ごした3週間の実り豊かな日々が、参加者自身の日本語によって生き生きと描かれています。また、直接日本語でさまざまな日本人と交流することで自らの日本語をブラッシュアップしていく様子も一人一人の報告から見えてきます。本報告書が「青年招へい事業」及び「青年海外協力隊事業」の更なる発展の指針となり、また参加者はじめ関係者の皆様の良き思い出の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本招聘計画の実現及び受入に御尽力いただいた皆様に改めてお礼申し上げると共に、「青年招へい事業」がさらに有意義なプログラムとなりますよう、今後ともご支援、ご協力賜りたくお願い申し上げます。

2003年3月

国際協力事業団中国事務所

所長　櫻田　幸久

全　員　集　合　！
（2002 年 12 月 8 日、逗子マリーナでの合宿セミナー　国際善隣協会・久恒氏提供）

参加者の一人　科技日報記者・陳丹さんの執筆記事
（本文 49~56 ページ参照）

参 加 者 一 覧

番号	氏　名	性別	所　　属　　先	備考
1	蒋　德華	男	国家科学技術部国際合作司（北京市）	団長
2	董　　林	男	吉林省長春市　第十一中学	団員
3	沈　清錦	女	吉林省長春市　朝鮮族中学	団員
4	車　爱英	女	吉林省梅河口市　第二中学	団員
5	鄭　　燕	女	遼寧省瀋陽市　朝鮮族第一中学	団員
6	何　　偉	男	遼寧省北寧市　第一高校	団員
7	劉　　姝	女	遼寧省大連市　大連育明高校	団員
8	張　敬岩	女	内蒙古自治区通遼市　科左后旗甘旗卡二中学	団員
9	于　艶春	女	内蒙古自治区赤峰市 民族師範高等専科第二附属中学	団員
10	劉　立華	女	黒龍江省ハルピン市 ハルピン理工大学外国語学部	団員
11	荘　　霓	女	江蘇省無錫市　東林中学	団員
12	程　元益	男	湖北省黄石市　湖北師範学院外国語学部	団員
13	鄧　　牧	女	湖北省長沙市　中南大学	団員
14	易　阿丹	女	湖南省長沙市　長沙外国語学校	団員
15	王　秋萍	女	甘粛省蘭州市　蘭州大学外国語学院	団員
16	羅　　華	女	貴州省貴陽市　貴州大学外国語学部	団員
17	閻　留強	男	河南省洛陽市　河南科技大学	団員
18	阿依努尔	女	新疆ウイグル自治区ウルムチ市 新疆師範大学外国語学院	団員
19	蘭　　卉	女	黒龍江省ハルピン市 ハルピン工程大学外国語学部日独研究室	団員
20	陳　　丹	女	科技日報社（北京市）	団員

17 陣 国名： 中国　分野名： 青年海外協力隊日本語教師 グループ

受入期間　平成14年12月1日 ～ 平成14年12月21日

月日	曜日	時刻	プログラム内容	実施場所	宿泊先
12/1	日	12:25	青年来日（NH９５６）	東京都	東京国際センター 03-3485-7051
12/2	月	9:30 11:30	ブリーフィング		
12/2	月	13:00 14:00	開講式		
12/2	月	14:20 15:10	分野別プログラム趣旨説明・団体紹介		
12/2	月	15:45 18:15	日本理解基礎講座「日本と日本人」		
12/3	火	9:00 11:30	日本理解基礎講座「戦後日本の歩み」		
12/3	火	13:50 15:40	JOCV事務局（マインズ）		
12/4	水	AM	国際交流基金日本語国際センター見学		京王プラザホテル 03-3344-0111
12/4	水	PM	早稲田大学日本語研究教育センター見学		
12/5	木	AM	国際善隣学院見学		
12/5	木	PM	凡人社見学		
12/6	金	AM	逗子マリーナへ移動	神奈川県	逗子マリーナ 0467-23-2111
12/6	金	PM	合宿（ボーリング大会、交流の夕べ）		
12/7	土	AM	合宿　講義「中国人に対する日本語教育」		
12/7	土	PM	合宿（グループ討論）		
12/8	日	AM	合宿（全体発表会）		京王プラザホテル 03-3344-0111
12/8	日	PM	東京へ移動		
12/9	月	AM	自主研修	東京都	
12/10	火	AM	沖縄へ移動	沖縄県	沖縄国際センター 098-876-6000
12/10	火	PM	沖縄センター見学		
12/10	火	PM	沖縄県庁表敬		
12/10	火	PM	歓迎会		
12/11	水	AM	沖縄キリスト教短期大学訪問・学生との交流会		
12/11	水	AM	講義「日本語教授法」		
12/11	水	PM	公文書館見学		
12/11	水	PM	首里城見学		
12/12	木	AM	那覇市立上山中学校訪問、昼食交流会		
12/12	木	PM	日本文化紹介（琉球舞踊）		
12/13	金	AM	沖縄国際センター日本語クラス見学／日本語講師との交流		
12/13	金	PM	ホームステイ		
12/14	土		ホームステイ		
12/15	日	AM	スポーツ交流（ボーリング）		沖縄国際センター 098-876-6000
12/15	日	PM	ホストファミリーと昼食会（お別れ会）		
12/15	日	PM	市場見学		
12/16	月	AM	広島へ移動	広島県	広島全日空ホテル 082-241-1111
12/16	月	PM	原爆資料館／平和公園見学		
12/17	火	AM	京都へ移動	京都府	京都全日空ホテル 075-231-1155
12/17	火	PM	金閣寺見学		
12/17	火	PM	竜安寺見学		
12/17	火	PM	嵐山（周恩来記念碑）見学		
12/18	水	AM	三十三間堂見学		東京国際センター 03-3485-7051
12/18	水	AM	清水寺見学		
12/18	水	PM	東京へ移動		

17 陣 国名：中国　分野名：青年海外協力隊日本語教師グループ

受入期間　平成14年12月1日 ～ 平成14年12月21日

月日	曜日	時刻	プログラム内容	実施場所	宿泊先
12/19	木		帰国準備	東京都	
12/20	金	9:30　10:50	評価会		
12/20	金	11:00　11:30	帰国説明		
12/20	金	12:45　13:15	閉講式		
12/20	金	13:15　14:15	歓送会		
12/21	土	10:35	青年帰国（NH９０５）		

訪日の総括

国家科学技術部国際合作司　　訪日団団長　蒋　徳華

日本国際協力事業団（JICA）の招請を受けて、我々中国青年教師代表団（日本語教師グループ）一行２０名は2002年１２月１日から２１日まで、日本を友好訪問した。期間は２１日と短かったものの、我々のように初めて日本を訪れた者でも、日本の風土と人情、文化生活、教育事情などを知ることができた。行く先々で日本の友人達の友好への思いを感じさせられた。訪日からすでに時が経っているが、今でも私の心の中には良い印象が残っている。今回の訪問は両国若者間の相互理解を深め、我々日本語教師の視野を広め、今後の日本語教育に有益なアドバイスとなった。だから訪問の当初の目的を達することができたと考えている。

今回の訪問での交流範囲は広く、活動内容も豊富であった。北京滞在時の JICA 中国事務所の担当者による JICA 事業紹介、日本でのスケジュール及び注意事項の説明、東京でのオリエンテーション、小・中・高・大学での授業見学、関係教育機関での講座、合宿やホームステイ、市内観光、広島平和記念館見学など、その全てがいろいろな角度から日本理解の機会を与えてくれた。私の日本に対する印象は主に以下のとおりである。

1.　周到で人間味あふれる受入計画

日本での短い滞在期間に、日本人が何をするにも丁寧で熱心であることを深く感じた。各スケジュールの手配も時間、場所とも詳細に計画されており、結果として予定していた行事を寸分違わず実行することができた。

京都ではアクシデントがあり、それが私のこの印象をさらに深いものにした。団員の一人が急病にかかったのである。それは深夜２時過ぎで、私がグループのコーディネーターの岳光氏（男性）と小川さん（女性）に電話をすることになった。彼らは時間外業務なのに一言も不満を言わず、すぐに救急車を呼び、病人はすぐに治療を受けることができた。しかも小川さんは病院まで付き添ってくれた。彼らが病院から戻った時には夜明けになっていたが、その日も小川さんは元気を奮い起こして我々に同行してくれた。

2.　中日両国は友好的な隣国。平和共存と共同発展が両国関係の主流

団員の中には日本で極右分子による反中国デモを見かけたことがある者もいた。しかし日本訪問を通じて日本人、特に日本の一般民衆は平和を愛し、中日両国間の平和共存の現状を大事にしていると感じた。沖縄での印象は特にそうであった。沖縄で我々を出迎えた瑞慶覧氏は我々に戦争の残酷さを語り、現地の平和記念館の見学に同伴し、さらに“一衣帯水”と書かれた色紙を私にくれた。これらはどれも、両国民の友好の思いを具現化したものである。

合宿ではある日本人教師が「以前新聞で中国脅威論に関するいろいろな記事を読んだが、現在あなた方と交流して、もし今後同じような内容の記事を見つけても信じることはないだろうと思う」と話した。日中友好の鍵は両国民の往来を促進することにあり、特に両国の若者間の理解を深め相互間の信頼を深めることにある。

3. 中日の教育の間には多くの共通点。我々が参考とすべき点も多い。

中国に比べて、日本は資質面での教育をより重視している。日本の教育の中で生じるいくつかの問題とその解決の道は、我々も考え参考とするに値する。たとえば日本の学校では１０年前に詰め込み方式の教育から緩やかな教育方式に転換し、教科書は薄くなり、自発性を喚起するような素材だけを生徒に提供するようになった。目的は生徒に学習課題を自ら選ばせ、生徒自身の学習に対する参加意識と積極性を引き出すことにある。

しかしこの方式採用にも弊害がある。一つは基礎知識の習得不足で、もう一つは本来勉強嫌いの生徒に勉強をしない理由を与えてしまい、勉強したくない人間がますます増えた点である。さらに日本の学校にはいじめがあり、社会問題になることもある。これらは中国では目下のところ、そう深刻というわけではないが、日本の今日は中国の明日であり、我々も大いに重視すべきである。

4. 学ぶに値する極めてハイレベルな都市管理水準

我々が見学した都市はいずれも整然として清潔であった。日本での２１日間、我々は清掃員を見かけなかったし、"衛生監督管理員"も見かけなかったが、通りは実に清潔で、我々は日本にいる間一度も靴を磨かなかった。自動車道路や歩道は路面が平らで、都市交通はスムーズであった。日本も中国も同様に人口密度の高い国であるが、日本の都市交通はうまく解決されており、日本滞在中、ひどい交通渋滞には一度も遭わなかった。また我々の注意を引いたのは、日本が都市部での軌道交通整備を非常に重視している点である。東京の地下鉄は縦横に走っており、少し混んではいたものの、車輌内は非常に静かで、携帯電話の音も聞こえなかった。乗車券をいたずらに捨てることによる環境汚染を防止するため、ホームを出る時に乗車券回収機が自動的に乗車券の回収を行っており、これらの細かい気配りが管理水準の高さを物語っていた。

5. 環境重視

視察中、日本人が環境保護を非常に重視していると強く感じた。都市緑化、樹木の保全が見事に実現されていた。沖縄でのホームステイで、私は瑞慶覧氏の家に投宿した。彼の家はもともと林の中にあり、800 種以上の「仙人掌（サボテン)」が植わっていた。隣家や村の別の家にもいろいろな色の花や樹木が植えられており、美しいことこの上なかった。逗子での合宿に向かう高速道路の住宅地区通過地域では両側に防音壁が設置されており、住民への影響を防止していた。

今回の訪問で私は日本社会に対する理解への第一歩を踏み出した。今後の仕事の中で日本人のあの一生懸命な業務態度を自分も身に付けると同時に、今の日本を宣伝して、中日友好の使者の役目を果たすつもりである。JICA に、特に中国事務所の友人達が我々の今回の活動のために尽くしてくださった努力に、改めて感謝したい。

（原文は中国語）

美しい思い出

吉林省長春市　第十一中学　　董　　林

夢にも思わなかった日本へ行くチャンスがあって、今回の旅は私にとってほんとうに美しい思い出になりました。

外国へ行くのは私にとって初めてですから、私はずっと不安の気持ちを持っていました。しかし、成田空港に着くと雰囲気が全く変わりました。成田空港のホールには一つの看板があります。その上に「お帰りなさい」と書いてあります。その看板を見て私は「あ、もう家に帰りました」という感じで、落ち着きました。そして「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」というような丁寧なことばがよく聞こえますから。ほんとうにいい感じをくれました。これこそ私の日本に対する第一印象でした。

日本にいる最初の１０日間、主に東京都で活動をしました。東京都内の各々の教育機関を見学することや、日本と日本人についての講義を聴くことや日本の先生方と合宿することなどでした。それを通じて日本語のレベルを高めることが出来たと同時に、教室の中では学べない知識をたくさん学ぶこともできました。しかしその中で印象が深く、収穫が最も多いのはやっぱり合宿だったと思います。

合宿は初めから皆さんがもっとも期待するプログラムでした。日本人の先生方と直接交流できるし、日本の学校とその教授方法も了解できますし。しかし、しょせん初めて日本人と合宿しますから、皆不安でそわそわしていました。ところが当晩の歓迎会で何十名もの日本人の先生方が拍手で出迎えてくれました。こういう盛んな場面を見て、さっきの不安をまったく忘れました。次の歓迎会とカラオケはほんとうに楽しかったです。そしてそれを通じて日本の先生方とお互いに知り合いました。それから寝室に帰って同じ部屋の先生方と遅くまでしゃべっていました。ほんとうに楽しかったです。

翌日、討論会を行いました。討論会では自分が教える生徒や勤めている学校の様子を互いに紹介しました。それから中日両国の教授方法などの話題をめぐって、討論を展開しました。そして私たちは中国と日本の教育制度の違いと共通点や問題点などについて交流し、お互いに理解を深めました。

休み時間のうちに鎌倉市立第一中学校の先生方の案内で、その中学校を見学しました。あまり大きくない中学校ですが、設備がとてもいいと思います。休みの日のため生徒が見えませんけれども、中国の学校と違った雰囲気を感じました。特に中国の学校にはない相談室やいろいろなクラブ活動に対して私たちはとても興味を持っています。ほんとうにいい発想だと思います。中国の先生方は「やっぱり日本の学校は特色がある」「中国の学校もこういうふうになったらいいな」と感心しました。合宿の間、見たり聞いたりしたことは私にとってほんとうにいい勉強になりました。

中国にいる時、うちの学校の日本人の澤田先生は、私が沖縄へ行くということを聞いてすぐ「うらやましい」と言いました。その時、沖縄はきっといいところだと思いました。実際、沖縄は確かにいいところです。山も海も中国の水墨画のようにきれいだし、人もとても親切です。沖縄で経験した二つのことが今でも頭の中に去来しています。

一つは市立上山中学校を見学したことです。市立上山中学校の先生方と生徒は私たち

を歓迎するために全員体育館にそろって、盛大な歓迎会を行ってくれました。生徒たちはいろいろなすばらしい出し物を見せてくれました。これらの出し物を心を込めて用意したことは一目で分かりました。特に学校側はわざわざ生徒と一緒に授業を受け、昼ご飯を食べるというプログラムを割り振ってくれました。私と一緒に授業を受けた生徒たちは、私がバスケットボールに興味を持っていると聞いたから、わざわざ私を歓迎するためにバスケットボールの試合を行ってくれました。チームの一員として生徒といっしょにバスケットボールをやって、日本の学校の雰囲気を体験することができました。

もうひとつはホームステイです。ホームステイの日々は日本で一番楽しい日々でした。ホームステイは日本人ともっとも近い距離で交際したプログラムでした。ホストファミリーのおじいちゃん、おばあちゃんはやさしくて、中国と中国人にかなり好意を持っている人です。おじいちゃんは中国へ８回行きました。中国のことをよく知っています。だから私たちは共通の話題がかなりあります。しかし、私はとても感動したのは、おじいちゃんが７５歳の高齢なのに私のために長い時間運転して、沖縄の名所を案内してくれたことです。彼は運転に集中できるように運転するとき時々指を咬みます。それを見て、私は涙が出るほど感動させられました。沖縄のホームステイ、沖縄のホストファミリーは私にとって一生忘れられないものです。そしてホームステイを通じて、日本の生活習慣を理解し、たくさんの友達を持つことができました。将来更に交流していく基礎もできました。

今回の訪問を通じて、私は進んだ授業方法を学びました。たくさんの友達もできました。もっと重要なのは、私の中日両国人民の友情を続けるという信念もしっかりしたものになったことです。

わたしの目から見た日本

吉林省長春市　朝鮮族中学　　沈　清錦

１．日本の町

日本に着いたのは、金色に染まった銀杏が目の前に広がっている、でも肌に少し寒さが感じられる初冬だった。

町はきれい、車が多い、人は優しい、これがわたしの受けた第一の印象だ。

地理的な位置のためか、日本の道路や道端の木の葉に塵やほこりがない。そして２１日間穿いた靴も穿いたばかりの時と同じぐらいきれいだった。日本では道を歩きながら煙草を吸っている人を見かけなかった。東京、沖縄、広島、京都など日本のあちこちに行ってみたが、どこも木と花がたくさん生えていて一生懸命に育てている跡をうかがい知ることができる。今の美しい国は、日本の国民一人一人が守って作ったものではないかと思った。

車は本当に多い。渋滞の現象がよく起こる。そのために道はさらに狭く見える。でも、赤信号を突き進む車は一台もない。いくら急いで道を歩いている人でも青信号になるまで待っている。ここから日本は秩序整然としていて、きちんとルールを守る国だと思った。そして公衆の場所には体の不自由な人のための施設がたくさんあるのに気づいた。例えばあまり広くない道でも目の不自由な人のための黄色い点字ブロックがあるし、地下鉄やバスにも足の不自由な人の乗り降りを便利にするための施設が備えられている。ほんとうに細かい所にも気を配っていると考えられる。

２．普通の日本人

今回、運よくホームステイ活動にも参加できて２泊３日で普通の日本人家庭で生活する機会があった。

ホストファミリーの家に着いたのは金曜日の夜７時だったが、高校生の子供２人はまだ家に帰っていない。その時私は、日本も中国と同じように、学生は夜遅くまでいろんな塾に通っていると思った。ところが８時ごろ帰ってきた時、手に旗や楽器やいろんなものを持っていたので、聞いてみるとクラブ活動に参加してきたそうだ。中国の学生は毎日朝から晩まで勉強ばかりしているので、こんなにクラブ活動に参加する時間は（夏、冬休み以外は）めったにないことだ。日本の学生は楽だなと思った。もう一つびっくりしたことは、親は子供の勉強ぶりについてあまり聞かないことだ。初めは外国人がいるからだと思ったがその後も一言も聞いたことがなかった。中国では子供が家に帰ったら、親の一番目の話は今日の勉強はどうだった？　テストはあった？　との話が普通で、テーブルでの話題も子供の成績や学校の生活だ。

食事の面でも中国と日本は大違いだと思う。中国では食事をするためには、多くの時間をかけて、煮たり、焼いたりするので、一時間か一時間半ぐらいかかるのが普通だ。それに比べ、日本人の食事の支度は簡単で３０分ぐらいで十分だと思う。生で食べるものが多いからでないかと思う。

日本人は環境保護意識が高い。ホストマザーはどんなものでも何をしてもごみになら

ないようにしている。スーパーに行く時は、布でできたかばんを持っていく。観光地に行く時は水とコップを持っていく。穿けないストッキングは台所の流しの網袋として使う。果物の皮や食べられないものは土に埋めて肥料になるようにする・・・。ホストマザーと一緒にいる間、一人の地球人として普通の生活でどのように環境を守るべきかを教えてもらった。

ホストファーザーとホストマザーは仕事をしていて本当に忙しい。でも私をはじめ、もう3回のホームステイを受け入れている。お金をかけて、時間をかけて、それに家庭全員が優しく招待してくれたことに私は本当に感動した。中国でホームステイをした経験がないから、普通の中国人がどうしているかはっきりわからないが、日本人は本当に優しくて、心の温かい人だと思う。日本は美しい国であり、国民はエネルギッシュだ。

3．日本の教育

今回日本に行って感じられたのは、日本の学生はあまり勉強しないことだ。話によると以前は日本も今の中国のようにまじめに勉強したそうだ。今のようになったのは、日本の地理的位置と関係があるのではないかと思う。日本はアジア大陸の東に位置し、太平洋と日本海に挟まれている。このためその文化は大陸の影響を受けているし、コミュニケーション手段の発達とともに、日本には西洋の文化ももたらされたのではないかと思う。日本にいる間、ある新聞で見たが、日本の中学生、高校生、更に大学生も数学の能力が低くなったそうだ。どんな影響を受けてもまず基礎知識はきちんと身につけるべきではないかと思う。

合宿セミナーでいろんな日本の教師と交流したが、日本の文部科学省では教員の海外派遣の事業を行っているそうだ。教員の海外派遣は、次代を担う青少年を育成する教員に、諸外国の教育、文化、社会などの実情を視察させ、国際的視野に立った識見と教職に対する誇りと自覚を高めさせるために実施しているもので、派遣者は文部省が選考し、決定している。また中・高等学校の英語担当教員を6ヵ月間又は12ヵ月間、英国、米国などの大学などに派遣し、英語能力及び英語教授法などに関する研修等を通じて指導力を高めさせ、各地で指導的立場に立つ英語教員の育成を目的とした海外研修事業を行っている。この事業では、実地研修の一環として学校訪問やホームステイなども行い、国際交流にも努めているそうだ。これはわたしが一番羨ましいことだ。中国ではめったにないことだから。

以上は私の日本での体験と少しの考えだが、不適当な所と全面的でない所がたくさんあると思う。多くのご指摘をお願いします。

私の忘れられない日本研修旅行

吉林省梅河口市　第二中学　　車　愛英

2002 年１２月１日から２１日まで私は中国青年海外協力隊日本語教師として日本国際協力事業団が主催した海外青年招へい事業に参加しました。日本語の勉強を始めてから一度日本へ行ってみるのが私の夢でした。今回この夢を実現することができて本当に嬉しかったです。２０日間の研修は永遠に忘れられない美しい思い出になりました。では次は日本で見たこと聞いたことを書きます。

１．花の国

１２月１日の夜明け、北京 21 世紀ホテルを出発する時は気温が低くて寒く感じました。しかし日本の成田空港に到着した時は暖かくて花も咲いていて本当にきれいでした。その時、ふと「日本人は花が好きだ」という話を思い出しました。研修中、道にも庭にもそれに壁にも花が飾ってあるのを目にしました。日本の生け花は世界でも有名だそうです。花は日本人の日常生活になくてはならないものだということがよくわかりました。

２．日本の道路

日本の道路は高速道路を含めて狭いですが、交通は便利で四方八方に伸びています。高速道路の近くには団地やビルがたくさん建っているので、両側に防音壁が作ってあります。特に人が多く集まっている東京は騒音がたいへんだと思います。しかし人が多いのにもかかわらず人々が自覚して交通規則を守っているので交通警察を見ることはほとんどありませんでした。

３．日本人

日本に行く前、私はいつも日本人が親切でまじめだと思っていました。成田空港に到着すると私達を迎えにきた小川さんと岳光さんが親切にバスの中へ案内してくれました。私達はバスで東京国際センターまで行きました。途中、二人の調整員から東京のいろいろな所について説明していただきました。本当に短い時間でしたけれども、私達は日本についていろいろなことを理解できたと思います。

私達はスケジュールに従い５日間、国際交流基金日本語国際センターや早稲田大学や国際善隣学院などいろいろな所を訪問しました。どこに行っても親切な日本人のお話や仕事への態度に深く感動しました。訪問を通じて私達は日本人のまじめな仕事への態度をまのあたりにして理解することができました。

１２月６日から８日まで逗子市で合宿セミナーがありました。合宿セミナーでは観迎会やボーリング大会や交流訪問などが行われました。夜はカラオケをしながら日本人との交流をもっと深めました。そして一緒に学校や学生の学習と生活についていろいろ話し合いながら日本と中国の学校の共通点や相違点についても認識を深めました。この話し合いはこれからの日本語教育に役立つだろうと思います。日本の先生達はお忙しい中、私達のためにお時間をおさき下さり、ありがとうございました。

日本で一番よく耳にする言葉は、「ありがとう」と「すみません」という言葉です。１２月１０日、私達は沖縄県へ出発しました。話によると昔、沖縄は「琉球」と呼ばれ、中国と深い関係があったそうです。現在沖縄は中国福建省の友好都市であり、いろいろな場面で助け合うようになっています。これからもそういった関係が続くことを願っています。歴史の講義で私達は沖縄県民のあたたかい観迎を受けました。

沖縄で二ヵ所の学校を訪問しました。中学校に行って、私達は組に分かれて学校のいろいろな所を見学し、茶道なども勉強しました。学生たちはとても礼儀正しく、積極的でした。そこで私達は琉球踊りも習いました。ちょうと難しかったですが先生のおかげで簡単な踊りならできるようになり、嬉しかったです。わずか３０分ぐらいの休み時間を利用して先生は日本料理も作ってくれました。私達はびっくりしながらもおいしく食べました。そんなに短い時間でこんなにおいしい料理がたくさんでき上がるとはだれも思わなかったので本当にびっくりしました。琉球踊りだけでなく沖縄県民の友情も感じられました。別れる時、みんな離れたくないという気持ちでいっぱいでした。

４．ホームステイ

１２月１４日午前９時ごろ、私を迎えにきた受け入れ先の知念洋子さんにあいさつをしてから出発しました。車で４０分ぐらいで知念さんのお宅に到着しました。知念さんがお茶やコーヒーなどの飲み物を用意している間、私は部屋を見回しました。びっくりしたのは壁にも机の上にも押し花がいっぱい並んでいて和室の半分ぐらいを占めていたことです。私がちょっと不思議に思っていたら、知念さんは私の心がわかったかのように押し花についていろいろ説明してくれました。美術にちょっと興味を持っている私にとってこのようなチャンスは今までなかったです。知念さんは今、日本中でも有名な押し花の専門家になっています。今は時々、近所の人に押し花を教えています。ちょっと疲れていたようでしたが、知念さんは休まずに６時までわたしにお土産用の「押し花」をいくつか作ってくれました。私は喜んでそれをもらいました。

翌日、私はホストファミリーと一緒に水族館へ行きました。夕食ではレストランで食べながらカラオケをしました。私達は一緒に笑ったり拍手したりしながら楽しい一日を過ごしました。１５日はボーリング大会がありました。２回目でしたがまだまだ下手なので恥しかったです。でも本当におもしろかったです。そうしている間にもついに別れの時間になりました。涙を流しながら今度は中国で会おうと約束しました。短いホームステイでしたが、沖縄の住民との交流の出来事は私にとって一生で一番楽しい思い出になると心の中で強く感じています。沖縄の素晴らしい自然、特にきれいな海、人々の優しさは絶対に忘れられないと思います。

５．広島と京都の見物

広島と京都の見物を通じて日本国民の平和に対する希望がもっと分かるようになりました。世界平和は私達全世界が守るべきことです。京都には有名なお寺がたくさんありました。中でも金閣寺や竜安寺などを自分で見ることができて何よりも嬉しかったです。日本国民はこのお寺を保存するため血のにじむような努力をしてきたのだろうと思いました。

２０日間の研修旅行、これは何年間も学んできた日本語を実践する良い機会であり、また他の先生方の日本語が非常に上手だということも確認することができました。JICA、

日本の政府、そして日本の皆様のおかげで日本へ行く機会が持てたことにもう一度心から感謝いたします。JICA の「人造り、国造り、心のふれあい」という言葉の通り、私達は日本で会った友達と中日両国に友情の橋を造っていくことができるでしょう。

私達研修員はこの研修で学んだ日本語の知識を使って日本で過でした生活についてホームステイについて、研修旅行、その他たくさんの素晴らしい経験について必ず近所の友達や生徒たちに詳しく報告します。

研修を通じて、日本語教師として日本をはっきり正しく理解することがどんなに大事なことかということが改めて分かるようになりましたし、日本や日本人のことも詳しく分かるようになりました。また視野を広げ、ものの考え方やグローバルな視点を身に付け、異文化に対する調整能力も養いました。日本と中国の文化の共通点や相違点についても認識を深めました。残念なことはホームステイがちょっと短かったという感じがしています。今度の研修旅行はこれからの日本語の教育に役立つだろうと思います。これをきっかけに中日友好のためにもっと頑張ろうと思います。

日本で感じたこと

遼寧省瀋陽市　朝鮮族第一中学　　鄭　　燕

2002年１２月１日の午後、私たち第１７陣日本訪問団を乗せたＮＨ９５６は予定どおり東京成田空港に着陸した。その日から私たち一行の２１日間の日本での訪問生活が始まった。

日本はアジア、ひいては世界的にも有名な文明国だと感じられた。特に緑に囲まれた町の様子、人たちのまじめな仕事振り、人に対する親切さ、ゆとりのある学校教育などは印象深かった。

日本の国全体の綺麗さにはすっかり感心した。東京や京都、広島、沖縄、どこに行ってもほこりなんかは全然なかった。２１日間靴を磨くことを忘れてしまった。でも毎日ぴかぴかして気持ちよかった。中国ではあり得ないことだ。ＴＩＣ（東京国際センター）でのことだった。朝、目が覚めてからベランダに出た。「そうだここに埃があるかもしれない」と思って隅の方をさわって見たが、やはり何もなかった。少しがっかりしたが、あらためて日本の綺麗さに感心した。特にこんないいい自然環境をしっかり守っている日本人の姿が目立った。道にはもちろん、どんなに狭い庭でも木や花が植えてある。それにどこの町でもいい加減に捨てたタバコの吸い殻が見られなかった。ゴミも、燃えるゴミと燃えないゴミをちゃんと分けて捨てる。ちょっと面倒くさいことかもしれないけど、自然を守って行こうとする日本人の気持ちを読み取ることができる。国民のこのような協力があったからこそ今日の綺麗な日本があるのではないか。世界でも有名な中国の黄砂。今も砂漠は広がっているそうだが、これは長い間の森林の濫伐と直接の関係があると知っていながら、今も貴重な山奥の木を切っているそうだ。何十年あとの自然環境のことは想像できないほど恐ろしくてたまらない。

日本は綺麗でそれに静かである。空港の待合室や地下鉄の中、デパートなど人がたくさん集まっているところで小さな声で話しているのは見かけるが、静かで公衆場所だとは信じられないほどだった。中国だったらどうなるだろう。全く違った様子かもしれない。日本人は他人に迷惑をかけようとはしない。いつも思いやりの心を持って行動するのが日本人であろう。

ある日、私は同じ団員の車さんと新宿へ買物に行った。帰る時、どの地下鉄に載ったらいいかわからないので隣の人に聞いてみた。すると彼は困った顔をして「私にもよくわかりませんが、地図で調べてみます」と言いながら、かばんの中から地図を取り出した。いろいろ調べてくれたけれどやはりよくわからないようだった。私たちは申し訳ない気がして「では、他の人に尋ねてみます。ありがとうございました」と言ったが、彼はまだまだ止めようとしなかった。地図とあちこちの地下鉄の路線図を対照してやっと見つけた。私たちより彼の方がもっと喜んでいるようだった。なんともいえない複雑な気持ちになった。もしこれが中国でのことだったら「分かりません」という一言を残したままどこかへ消えてしまっただろう。私も他人に道を聞かれて親切に教えてあげなかったことはなかったかしら。あったかもしれない。そう思えば思うほど恥ずかしくなった。

こんな日本人にも心痛い歴史があった。広島へ行って原爆地の遺跡や博物館も見学した。原爆のため崩れた建物、苦しんでいる人々、悲惨な様子を見て、戦争の恐ろしさと平和のありがたさを考えさせられた。戦争で死んでいくアフガニスタンの子供たちが心に浮かんできた。世界の人々が兄弟のように幸せに暮らせる日がいつかは来るだろう。その時は、広島の平和灯も燃やし続ける必要がなくなるだろう。

古都である京都へも行ってみた。何メートルかおきにお寺や神社がたくさんあった。京都には鹿苑寺の金閣、龍安寺の石群、国宝三十三間堂、清水寺の清水舞台など世界遺産に登録されているものがたくさんある。日本人は普通、結婚式は神社とかお寺（最近の若い人は教会でも）へ行き、葬式はお寺で行うそうだ。一つ驚いたことは日本のお坊さんのことだ。日本のお坊さんは中国のお坊さんと違って、結婚もできるし肉も食べられるしお酒も飲めるそうだ。それに税金も払わない。それで「坊主まる儲け」という言葉があるそうだ。これは中国人にとってはとてもおもしろいことだ。

京都というとお寺や神社が思い出されるように、沖縄というと綺麗な海が思い出される。沖縄は日本でも特別なところで、昔は琉球王国として中国との往来も頻繁であったそうだ。明治以降日本の一つの県となって沖縄と呼ばれるようになったそうだ。沖縄は第二次世界戦争で被害を一番多く受けたところである。だから沖縄県民は戦争の犠牲になった多くの人々を悼み、沖縄戦争の歴史的教訓を正しく次世代に伝え、全世界の人々に心を訴え平和の樹立に寄与するため、沖縄県平和祈念資料館を設立したそうだ。

沖縄には方言があり、本土の日本人さえ聞いても分からない。聞くところによると今の若者たちはほとんど方言を話さないので、方言がだんだん消えていっているそうだ。また、沖縄には伝統舞踊があって、嬉しい時やめでたいことがあったらみんなで踊る。私も踊ってみたが、とてもおもしろかったし運動にもなった。

沖縄には「あえば兄弟」という言葉があるが、今回沖縄での２泊３日間のホームステイを通じてその言葉の真の意味をしみじみ感じた。今回のホームステイで、私は中日両国国民の続けてきた友情は失われていないだけでなく、さらに深くなっていることが分かった。これこそホームステイでの私のもっとも大きな収穫だったと思う。日本人民の深く暖かい気持ちを、ぜひ中国人民に伝えて、一衣帯水の友好関係を続けていきたいと思っている。

青年招聘事業に参加して

遼寧省北寧市　第一高校　　何　　偉

時間の立つのは早いもので、いよいよ明日帰国いたします。私は帰国後に活かしていきたいことについて以下に報告したいと思います。

今度の日本での研修を通じて、大いに教えられ、大いに啓発され、大変いい勉強になりました。「聞いた事があるだけで、見たことがない日本」を自分の目で見て、日本の良さをたくさん知ることができました。私が日本を訪問して気付いたことを以下に挙げてみたいと思います。

まず第一に、日本の社会ではどこへ行っても親しみやすくて朗らかな雰囲気に満ちていました。人に対してとても親切です。特に外国人や見知らぬ人を見ると進んで声をかけて挨拶をしていました。例えば、道に迷った人に道を聞かれたとき、彼らは熱心に道を教えたり、目的地まで連れて行ってくれたりします。それから人々は自主的に社会の公共道徳と時間を守っています。バスも電車も込むには込んでいますが、先を争って乗ったり降りたりする人はほとんど見られませんでした。公共の場はとても静かできれいです。自然環境や設備がきちんと保護されていました。

第二に、日本の大学、高校、中学とも、優れた教授法を持っているということです。日本の教授法は生徒の個性を伸ばすことを重視していて、授業中、生徒は生き生きとして活気に溢れています。先生は優しく熱心に生徒たちを啓発しながら教え、学生達は積極的に発言していました。「授業中、学生たちの個性を養い、伸ばすことを大切にする」ということを目的としているようです。それはひいては学生達に自分で考え、分析し、解決できる能力を高めさせることにつながると思います。それと同時に学生達の心理面を健全に成長させることにつながると感じました。

上に例を挙げましたように、これから日本で見たり聞いたりして身につけた知識を生かして、日本の優れた教授法や社会の公共道徳や日本の風土や人情、生活ぶりをありのままに生徒たちに教えていこうと思います。このような有意義な研修に参加させていただき心より感謝しております。これからも絶えず自分の授業のレベルを高めて、中日人民友好のために、少しでも自分の力を尽くしていこうと思っております。

忘れられない研修旅行

遼寧省大連市　大連育明高校　　劉　　姝

平成１４年１２月１日から１２月２１日まで、青年海外協力隊日本語教師コースの一員として、日本へ研修に行きました。東京、京都、広島などは世界でも有名な都市で、いろいろな経験ができてほんとうに楽しい旅行でした。日本の歴史と文化及び現代科学技術を前よりも理解することができて、いつまでも忘れられない研修旅行だと思います。

一番好きな場所：京都

京都は昔の日本の都です。千年以上の歴史と文化を持っているので、日本のシンボルと言えるのはもちろんのことだと思います。京都には千個ぐらいお寺があるそうで、私たちは有名な金閣寺、清水寺、三十三間堂などのお寺に行きました。

金閣寺に入ったとき、静かな庭、高い木、きれいな湖、立派なお寺を見て、平和な雰囲気が心から感じられました。しかし残念だったのは金閣寺が補修中で、ぴかぴか光っているほんとうの金閣寺が見られなかったことです。

清水寺は一番印象深いお寺だと言えます。お寺は木だけで作られていて、くぎを一本も使っていないそうでびっくりしました。寺の音羽の滝はとても有名です。滝の水は３本あり、それぞれ意味が違います。左側は学問の水、真ん中は愛の水、右側は健康の水です。私は学問の水を飲みました。水が冷たかったので、胸がたちまちさわやかになりました。お寺にはとても大きな舞台がありました。木の柱を 139 本使って作られているそうです。舞台から眺めると、京都市全体が見えました。とても美しいと思いました。友達と一緒にたくさん写真をとって楽しかったです。

それから、龍安寺や三十三間堂へ行きました。面白い案内を聞いたりきれいな景色を見たりして日本のすばらしい歴史と文化が深く感じられました。

一番おもしろかったこと：自主研修

小さい時からディズニーランドへ遊びに行くのにあこがれていました。１２月９日は自主研修で、この夢をやっと実現することができました。その日は東京で初めての雪が降りました。それなのにディズニーランドは人でいっぱいでした。ディズニーランドには遊ぶ所がいろいろあり、その中で一番おもしろかったのは飛濺山（スプラッシュ・マウンテン）です。船に乗って山の頂上から突っ込んだ時、みんな大声で「あー」と叫びました。しかし団長さんと私は黙っていました。なぜならそれは一列目に座っていて顔がびしょぬれだったからです。そして山の中のカメラから写真を撮られました。みんな買いました。私にとって一番高い写真です。その日は楽しく過ごしました。

１２月１９日の自主研修は友達と一緒に買い物に行きました。東京で有名なデパートの一つの高島屋へ行きました。そこでは世界中のいろいろなものが売られています。私は化粧品を買いました。店員さんから親切なサービスを受けました。日本のサービスの良さは有名ですが、この店員のサービスを通してそのことをしみじみ感じました。それから電気屋へ行きました。日本の電気製品は世界的に有名です。世界で一番先進的な技

術を持っているばかりでなく、種類も一番多いです。大変驚きました。まさに「百聞は一見に如かず」でした。

一番忘れられないこと：ホームステイ

１２月１０日、美しい沖縄に着きました。一生忘れられないホームステイをしました。ホームステイ先のご主人は桃原純さんといいます。奥さまは桃原恭子さんです。一日目、恭子さんに生け花を教えていただきました。恭子さんと生け花の先生の指導のもとで、私は自分で花を生けました。うれしくてたまりませんでした。その生け花といっしょに写真をたくさん撮りました。生け花をしているうちに、日本文化についてもっと詳しく理解できるようになりました。その日の夜、桃原純さんと一緒に学校の先生たちの忘年会に参加しました。日本の先生と一緒に食事をしたり、話したり、遊んだりして、新しい経験ができました。

つぎの日、沖縄美ら（ちゅら）海水族館に行きました。そこには最大の見せ場、7500トンの世界最大級の水槽「黒潮の海」があります。ジンベエザメやマンタの群泳を巨大アクリルガラスを通して見ました。それにアクアルームもあります。そこはまさに海底のようです。ジンベエザメやマンタの泳ぎを下から見上げました。たいへん素晴らしかったと思います。水族館からすると、日本の科学技術はほんとうに進んでいるとしみじみ感じました。ホームステイを通して、普通の日本人の生活を深く理解すると同時に、厚い友情を結びました。

今回の研修旅行は、日本の文化や日本語を勉強するいいチャンスになりました。いつまでも忘れられない研修旅行です。

わすれられない旅行

内蒙古自治区通遼市　科左后旗甘旗卡（カンチカ）第二高級中学
張　敬岩

平成１４年１２月１日、日本の中国青年招へい事業によって、日本語教師グループの一員として日本に３週間行くことができました。３週間で東京、沖縄、広島、京都の４ヶ所へ行きました。

１２月１日午後一時半ぐらいに、わたしたちが乗った飛行機は成田空港に着きました。それからバスで東京国際センターへ行きました。そこで３日間泊まりました。東京国際センターで「日本と日本人」「戦後日本の歩み」のふたつの講座をききました。そこで、わたしたちのグループの協調員を担当している小川さんと岳光さんに会いました。それからの３週間、お二人はずっとわたしたちと一緒にいて、世話をしてくださいました。

東京にいるとき、青年海外協力隊事務局、国際交流基金日本語国際センター、早稲田大学日本語研究教育センターを訪問しました。早稲田大学では大学の授業を見学しました。「語の意味」についての授業でしたが、ちょっと難しいと思いました。また国際善隣学院という日本語学校にも見学に行きました。留学生たちは勉強のほかにアルバイトをしなければならないので、とても忙しいそうです。それから凡人社にもいきました。そこにはたくさんのいい本がありました。しかし本は高いし、重いのでそんなにたくさん買えなくてとても残念でした。

都内活動のなかで一番深く印象に残ったのは合宿セミナーです。逗子マリーナで日本の中学校の先生たちと一緒に和室に泊まり、交流をしました。その先生たちとはいい友達になることができました。国に帰ってからもメールや手紙で連絡したいと思っています。

東京にいるとき自由自主研修がありました。その日わたしはほかの先生と一緒にさくらやとビックカメラへ行きました。そこで小さいデジタルカメラを買いました。時間があったので、いろいろなものを見てゆっくりすごしました。都会の中では高層ビルやにぎやかな場所だけでなく、ホームレスの姿も見ました。

１２月１０日から１６日までは、沖縄で過ごしました。沖縄は今回行った中で、わたしがいちばん好きなところです。行ったときは冬でしたが、わたしのような中国の東北地方から来た人間にとってはとても暖かかったです。薄い服をあまり持っていなかったので、沖縄に着いたとき最初はちょっと困りました。沖縄に着いた最初の日、那覇市おきなわ国際センターにとまりました。その午後、沖縄県庁を訪問しました。次の午前中はキリスト教短大を訪問しました。そこで一時間の授業に参加しました。その先生の教え方は特別でとても楽しかったです。同時に教え方についていろいろ考えさせられました。その先生の微笑みを今までもはっきり覚えています。そのあと県公文書館と首里城を見学しました。とてもすばらしかったです。

１２月１２日は那覇市立上山中学校を訪問しました。とても歓迎してくれました。昼ごはんはクラスで学生たちと一緒にたべました。そこの学生たちはとてもかわいいです。日本語の名前の中国読みをわたしたちに聞きました。みんなとてもまじめに覚えました。

わたしたちは感謝の意を表すために歌を歌いました。それが終わってから、わたしは沖縄のＮＨＫの記者にインタビューをされました。突然なのでわたしは緊張して、あまりよくできなかったと思います。

沖縄では今回の日本訪問で一番いい経験をしました。それはホームステイです。二日間だけでしたが、ホストファミリーと深い友情を結ぶことができました。わたしのホストファミリーは又吉ファミリーでした。仕事を定年された又吉ご夫婦とおばあさんのご家族でした。三人のお子さんは全員ほかの都市に住んでいます。ホストファミリーはとてもやさしかったです。ちょうど父と母の年齢に近かったので、又吉さんはわたしにお母さん、お父さんと呼んでくださいといいました。わたしはとても感動しました。

二日目に、又吉お母さんといっしょに沖縄の水族館へ行きました。そこでわたしが今まで見たことのない魚をたくさん見ました。たくさんの写真を撮りました。又吉お母さんは自分で作った押し花をくれました。またその作り方も教えてくれました。沖縄の代表的な花はハイビスカスとブーゲンビリアだと教えてくれました。沖縄の方言も少しずつ勉強しました。沖縄の人はみんな伝統的な文化をとても大事にします。わたしたちにたくさん伝えてくれました。沖縄を離れるとき、わたしたちはみんな泣きました。もしもう一日あったらどんなにいいだろうと思いました。

沖縄のあと飛行機で広島へ行きました。広島では平和記念公園しか行けませんでした。原爆ドームと広島平和記念資料館を見ました。核兵器の人類に対する害を深く感じました。公園には今も花や千羽鶴が絶えません。わたしも千羽鶴をひとつ作って、平和を祈ります。

１７日、新幹線で広島から京都へ行きました。新幹線に乗ったのは初めてでしたから、うれしかったです。京都はさすがに古都です。お寺がたくさんあります。時間があまりないので、五ヶ所を見学しました。龍安寺、十三間堂、金閣寺、清水寺、嵐山へ行きました。龍安寺には一面に白砂を敷き詰めた長方形の庭があります。その中に大小１５個の石があります。けれども、それはどの面から見ても１４個の石にしか見えません。深い禅の心を感じさせる庭です。金閣寺は広く知られているお寺です。残念なのはわたしたちが行った時、ちょうど工事中だったことです。美しい金閣寺をはっきり見ることができなかったです。でもその寺の中の景色はとてもすばらしかったです。つぎに清水寺へ行きました。このお寺は７９８年に建てられました。本堂は木で作られています。くぎを使っていません。おもしろかったのは音羽の滝の三つの滝です。この三つの滝には三つの意味があります。わたしは真ん中の水を飲みました。真ん中の水は愛の水といわれているそうです。つぎに嵐山へ行きました。周総理の記念碑を見に行きました。わたしたちはひとりずつ花をお供えしました。

新幹線で京都から東京まで行く途中、富士山が見えました。新幹線の中で、わたしたちはうれしくて写真を撮ったり、話したりしましたが、ほかの人たちは静かに座っていました。

東京に戻ったのは１９日です。その日は休みなので、わたしは羅華さんといっしょに街に出ました。浅草寺へ行きました。とてもいいところです。帰る途中わたしたちは新宿駅の中で、道に迷ってしまいました。だいたい一時間ぐらい迷ってやっと帰れました。わたしたちは笑いながら、これもいい経験ですねと言いました。

この三週間の訪問では、毎日新しい経験をしました。いい思い出になりました。帰国後、きっと自分の目で見た日本、自分自身で経験した日本を学生たちに伝えたいと思

います。また言語の勉強は言語を勉強するだけではなく、その国の文化、環境、考え方などを理解しなければ、うまくコミュニケーションすることはできないと思います。これからは必ず今度の経験を生かそうと思います。

報　告　書

内蒙古自治区赤峰市　民族師範高等専科第二附属中学　　于　艶春

時間の立つのは早いものです。「アッ」という間の三週間でした。今度の見学を通して、私たちは日本の学校のことが分かりました。日本の生徒のことが分かりました。私のような日本語の教師にとっていい勉強になりました。それに日本の名所旧跡を見学しました。私たちは日本をより理解し、知識を増やしました。これからの仕事にきっと役に立ちます。

日本はきれいで美しい国です。私たちが日本に着いたとき雨が、遠い中国からの私たちを迎えてくれました。雨の中に木々の緑が映えていました。赤い葉や黄色い葉やきれいな花が咲いている木が混じっていて、まるで公園のようでした。日本は清潔なところです。美しい上にきれいです。特にゴミの捨て方には注意しなければなりません。日本はゴミを捨ててもいい曜日と時間が決まっています。また、曜日ごとに捨てることができるゴミの種類も決まっています。決まった種類のゴミ以外は捨ててはいけません。

そして日本は礼儀正しい国です。日本人は思いやりを持っています。人に迷惑をかけない意識を持っています。日本人は音に敏感です。ドアは静かに閉めます。また公共の場で大声で話すのは避けた方がいいです。電車に乗ると「携帯電話はご遠慮ください」という放送が聞こえます。込んでいる電車の中でも通り過ぎる人のためにできるだけ通り道を空けています。日本では左側を歩いています。しかし中国では右側を歩いています。だから右側を歩き慣れている私たちは、つい交通規則を破ってしまいました。

また私たちは国際交流基金日本語国際センター、早稲田大学、国際善隣学院などを見学しました。そこで図書館、コンピューター室などの設備も見学しました。それに留学生の受け入れについて説明がありました。どんな条件で留学できるかが分かりました。そして授業を見学しました。日本の先生はどのような教え方で教えているのかが分かりました。私たち日本語教師にとって今後役に立つ見学でよかったと思います。凡人社も見学しました。いい本がたくさんあり参考になりましたが、価格が高くて買うことはできませんでした。好きな本が手に入れられないのは残念なことです。

それから、わたしたちは日本の学校を見学させていただきました。日本の教師とお互いに交流しました。特に逗子マリーナで日本の先生方と合宿セミナーを行ったのがよかったです。三日間、同じ部屋に泊まり、同じ食事をとりました。そしてお互いに中国と日本の文化、両国教育から中日の風俗習慣の違い、伝統文化までいろいろ語り合い、有意義な交流を行えたと思います。特に次のようなことが印象に残りました。まず中国と日本の生徒は皆熱心に勉強していますが、私たちの感じでは中国の生徒の勉強時間の方が長いと思いました。ただし中国の生徒たちは受験の科目だけを勉強し、クラブ活動の時間は少なくなっています。反対に日本の生徒たちはいろいろな課外活動があります。第二は、中国と日本ではクラスの人数の差が大きいです。日本の学校では少人数で教育を行っているので生徒たちは知識を身につけやすく先生は教えやすいと思います。

その上、日本の学校には相談室もあります。悩んだこと、悲しいことなどのストレスを解消することができます。個性を養うのに役に立ちます。今、中国と日本の学校では

生徒の中にいじめもあります。そういう目にあった時、相談室に来て苦境を切り抜けることができます。これは生徒に意欲をもたせ、粘り強く学ばせ、心豊かで正しい行動をさせ、心身共に健康な生徒にさせます。

今回の研修では美しい沖縄県でホームステイが行われました。現在の日本の家庭にヨーロッパ文化の影響が見られます。日本の国民の家でも畳とソファーが一緒にあり、朝食でもパンとミルクがあります。子供と両親の仲もよくなります。しかし男尊女卑の影響が今でもあります。日本の男性は働き者です。しかし、仕事を終えて帰宅した主人は何もしなくて、ごはん、お茶のような細かいことでも妻がしてくれます。日本の男性はとても楽です。だから男性だったら日本で生活し、女性だったら中国で生活した方がいいです。たった三日間のホームステイでしたが、私たちはホストファミリーに温かく迎えられました。深い友誼ができました。泣きながら別れたことはいつまでも忘れられません。

私たちは日本で金閣寺、玉泉洞、三十三間堂などのような名所旧跡を見学しました。私たちは古い時代に思いを馳せました。広島で原爆資料館を見学しました。原爆の恐ろしさが分かりました。日本につらさと困難をもたらしました。その時人々が壊された家のことがつらくてたまらないと思っていたことが感じられました。わたしたちは、たまらず、平和を祈りました。世界は平和が要るし平和は世界の人間が一緒に守るべきです。

今度の見学を終えて、私たちは視野が広がり、日本への理解をより深めました。私たち日本語教師にとっていい勉強になりました。私たちは帰国してから、きっと目で見たこと、耳で聞いたことをそのままに生徒に教えてあげられます。中日友好に力を捧げたいと思っています。

忘れられない経験

黒龍江省ハルピン市　ハルピン理工大学　　劉　立華

2002 年１２月１日から２１日まで私は青年海外協力隊日本語教師グループのメンバーとして日本を訪問しました。ほんの二十日間でしたが、いろいろな経験があって、たいへんいい勉強になりました。

この度の訪問は JICA（国際協力事業団）が実施している交流事業の一環で、青年招聘事業と言われています。団員は中国の各中学校、高校、大学で日本語を教えている中国青年教師です。私たちは共同活動、授業参観、地方旅行、日本青年との合宿、ホームステイなどを通して、日本および日本人に対する理解をいっそう深めました。

１２月１日、私たちは飛行機で東京に着きました。東京国際センター（ＴＩＣ）についたのはもう４時ごろでした。部屋はあまり広くなかったですが、とてもきれいでした。２日から９日まで主に東京都内活動でした。ＴＩＣで「日本と日本人」、「戦後の日本の歩み」という講座を聞きました。この講座で今の日本の政治、経済、社会、文化と日本人の日常生活などいろいろな状況がわかりました。そのあと JICA 本部や国際交流基金日本語国際センターや早稲田大学を訪問し、国際善隣学院や凡人社などを参観しました。

日本へ行く前北京での説明会の時にも聞きましたが、JICA はいろいろな国でたくさんの援助をしています。JICA 本部でみなさんのまじめに仕事をする様子を見て、とても感心しました。国際交流基金日本語国際センターで事業説明を聞いて、施設と授業の見学をしました。日本語国際センターの主要事業は海外日本語教師の研修や日本語教材の開発、作成及び援助などです。私はその教材を日本語の参考書として時々使用していますが、大いに役立ちます。センターの研修室には世界各国からの研修員がいます。それぞれの日本語レベルに応じて初級、中級コースがあります。機会があればここで日本語教育についての研修ができればいいと思いました。

６日と７日の２日間、私たちは逗子マリーナで日本青年と合宿セミナーをしました。合宿セミナーに参加した日本青年は主に鎌倉市の中学校の先生たちですから、共通話題がたくさんあります。自己紹介から始まりましたが、自分の学校や住んでいる都市を紹介している時、もし誰か聞きたいことがあればその場で質問して、答えてあげました。中日学校の教育制度の異同や授業のしかたから、中日青年の生活、考え、興味まで交流しました。とてもいい雰囲気にあふれていて、時間のたつのも忘れました。そしてボーリングやカラオケもしました。とても楽しかったです。初めて畳に寝ましたが、暖かくて気持ちがよかったです。８日、鎌倉大仏を見に行きました。かなり古い仏像ですが、よく保存されてきれいです。

１０日から、一週間の沖縄旅行が始まりました。飛行機から富士山が見えました。富士山は雲に囲まれて真っ白な頂上だけ見えましたが、とてもきれいでした。飛行機を降りて空港に着いたら「めんそーれ」（歓迎）という言葉を見て、やはり沖縄だなと思いました。観光バスに乗りました。ガイドさんは三十代の女性で、とても活発な人でした。沖縄の民謡を歌ってくれて沖縄方言も少し教えてくれました。まず沖縄県庁へ表敬に行きました。団長さんが副知事に挨拶をする時の通訳をすることになりましたが、ちょっ

と緊張しました。夜の歓迎会でホストファミリーの川上さんに会いました。川上さんの勧めで沖縄そばを食べました。とてもおいしかったです。

１１日からキリスト教短期大学、上山中学校、国際センターの授業参観をしたり、県立公文書館、首里城公園、琉舞道場を見学したりしました。公文書館は行政的役割を果たした公文書等の中から将来にわたって歴史的に重要なものを収集し、整理し、保存するとともに利用に供する役割があります。だから一般市民でも利用できてとても便利です。首里城公園は昔の琉球王国の宮城で、世界文化遺産でもあります。正殿の色、構造から見れば中国の宮殿とよく似ている感じがします。古くから中国と歴史的、文化的に深いつながりがあることも証明できます。琉舞道場で琉球舞踊を見ましたが、沖縄の人々は自分の喜怒哀楽を舞踊の形で見事に表します。

楽しみにしているホームステイの日が来ました。私が行くホストファミリーは六十歳ぐらいの夫婦二人です。その夜、私を迎えるために息子さんや娘さんや友達も来ました。川上さんは息子さん二人と娘さん一人がいます。皆結婚して別々に住んでいます。八人の孫もいます。とてもかわいい子供です。私たちはおいしい料理を食べながら、話しました。私は一番上の孫―日向子ちゃんといい友達になりました。次の日、川上さん夫婦は車で沖縄美ら海水族館へ連れて行ってくれました。水族館には名前が読めない魚がたくさんあります。大規模なサンゴの生態飼育を観る事もできます。まるで神秘な海底の世界に入るような感じです。水族館を出てから、熱帯ドリームセンターへ行きました。ドリームセンターには三つのラン温室があって約2000株のラン展示を行っていて、四季を通してランの花の観賞が楽しめます。花と夢にあふれたところで、とても美しかったです。写真をたくさんとりました。

１６日から地方旅行で広島と京都に行くスケジュールでした。広島で原爆ドームと平和記念資料館を参観しました。広島は世界二次大戦で原爆を受けた都市です。原爆で被害を受けた人達を記念するために平和記念資料館を建てました。それと同時に日本人民のもう二度と戦争を起こさないようという平和を望む気持ちを表しました。

新幹線で京都に行きました。京都は日本の古い都で日本の歴史や文化の象徴ともいえます。日本に来る外国人はだれでも一度京都に行きたいと思います。京都の町には古いお寺と新しいビルが立ち並んでいるのがよく見えます。私たちは金閣寺、竜安寺、清水寺、三十三間堂、嵐山の五つのところを見学しました。その中で私が一番好きなのは清水寺です。清水寺は日本の古い寺の一つで、798 年に建てられました。清水の舞台というところに立って、京都の町の風景を眺めることができます。人を驚かせるほどの高さです。音羽の滝を見ました。滝の水が三本あって、それぞれ学問、愛、長生きの意味を表します。私は学問の水を飲みました。冷たくておいしかったです。嵐山はわが国の周恩来総理が留学なさったところです。私たちは尊敬の気持ちで周恩来総理の記念碑に花を捧げました。

１９日に東京に戻って、評価会の後で今度の訪問が終わりました。この二十日間を通して、私たちは自分の目で日本を見、日本人民と交流し、以前教科書で習っていたことより大きい成果をもらいました。これは今後の日本語教学にたいへん役立ちます。この度の訪問で習得したものを生かしてこれからの授業や仕事に使うと思います。そして日本人民の中国人民に対する友情を自分の同僚や友達や学生たちに伝えようと思います。

訪日レポート

江蘇省無錫市　東林中学校　　荘　　霓

２１日間に及ぶ訪日活動は無事、終了した。その日々を思い返してみれば、短い時間ながら内容は大変豊富な活動であったということができる。一連の講座を通して、わたしは日本の国や日本国民についてはもとより日本経済や文化等の領域にいたるまで深く理解することができたと思う。

また、大学や中学の参観およびそこでの日本側の教員たちや学生たちとの交流、対話を通して、両国の教育理念、方法などを共有しあい、お互いに長所を取り入れ、短所を補い合うことができた。そのことによって今後の教育のありかたについて、新しい理念、思考を得ることができたと感じている。

さらに、日本の一般の人々との交流を通して、両国民の生活スタイルや文化習慣についてお互いに理解を深めることができ、友好関係を深めると同時に多くの友人を得ることができた。今後も連絡を取り合って交流を重ねていきたいと考えている。

このことは将来の日中両国民のあいだの友好関係の発展のために強固な基礎を築くことになるだろうと確信している。以下、いくつかの項目にわたって今回の訪日活動を通して得られた私自身の感想とその成果について述べることにしたい。

１．日本の学校における先進的な教育方法、手段について

訪日中、わたしに深い印象を残したのは、東京滞在中に訪問した鎌倉第一中学校と沖縄で訪問した沖縄キリスト教短期大学である。宿舎における分団討議をへて、わたしたちは鎌倉第一中学校を訪問することに決定した。

そこでわたしたちはチームティーチング方式（Ｔ．Ｔ方式）という新しい授業スタイルを目にすることができた。例えば英語の時間などに二人の先生が一緒に共同で授業をするのである。すなわちひとりの日本人教師のほか、もうひとりアメリカ人またはイギリス人の教師が共同で授業を行っていた。

この方式の長所は次の二点である。まず外国人教師が授業を行う過程で特に文法項目を説明する際、必ずや学生たちと十分に意思疎通ができない場面が出てくると思われるが、その時、日本人の先生が通訳の役割を果たすのである。このようにすれば学生たちにネイティブによる本場の外国語を学ばせることができると同時に、生徒たちとも十分な意思疎通を行うことが可能となる。

さらに練習を行う際、生徒たちを二つのグループに分けて分団活動を行うことで、より多くの学生に個人指導を行い、必要なアドバイスを与えることができる。

またこの学校において、もうひとつ「生徒相談室」という新たな教育上の取り組みを見つけることができた。ここは生徒たちの悩み事に耳を傾ける場を提供している。臨床心理を専門とする先生が、生徒たちの成長の過程で起こってくる様々な悩み事や人間関係のトラブルへの対処などについて生徒たちの話を聞き、アドバイスを行うのである。

わたしは中学生たちの年齢は精神的にも身体的にも最も揺れ動く年ごろであると思う。彼らは信頼でき、個人の秘密をしっかりと守ってくれ、そして健やかな成長に向けて的確に導いてくれる先生を強く必要としているのである。そのようなことからわたしはこ

の取り組みは中国の中学においても大いに学び、取り入れる価値があると考えている。

それから沖縄キリスト教短期大学の教室での参観もわたしに多くの啓発を与えた。わたしたち一行は総合教育学科主任の上原明子先生の授業を参観することができた。学生たちは留学生たちと日本人学生たちの両方から成り立っており、学生たちが話したり、身体を動かしたり、あるときには先生が講義を行ったりと、授業にとても多彩な活動を取り入れていた。この授業の目的は留学生たちに対して日本人学生との交流経験を積ませることを通して、お互いの文化を学ばせることである。

上原先生の授業法はとても創意に満ちているように感じられた。先生がデッサンの指示を出すと学生たちは極めて主体的に想像力を発揮しているように感じられた。先生は学生たちにひとつのテーマと注意点を指示し、学生たちにその指示の範囲内で絵を描かせた後、それをみんなに見せながら質疑応答し、そして総括していくのである。この方法は大変新鮮に感じられた。すなわち学生たちの個性の伸長と活発な教室活動を重視しているのである。先生の啓発を通して学生たちの発見、分析、問題解決能力の獲得と発達を訓練しているのである。これらもわたしたちが学ぶに値することであると思う。

２．ホームステイと合宿を通して、日本人の生活習慣を理解し、お互いの深い友好関係を打ちたてることができたこと

沖縄でホームステイをした時の、沖縄の人々の人情は忘れられない。

わたしのホームステイ先のご主人は、わたしをまるで自分の子どものように実に細やかに面倒を見てくださった。それだけでなく水族館や福州園などの名所にも連れていってくださった。福州園は沖縄市と福州市が友好都市提携１０周年を迎えたのを記念するために造られ、1992 年９月に完成したものである。中国の伝統的建築様式は大貿易時代の琉球王朝の文化に多大な影響を与えている。福州園には福州の名所旧跡の特色をかなり忠実に取り入れた「于山」「烏山」「白塔」「闽江」といった建築物が建てられている。これらは、全て中日友好の証である。

今回のホームステイは二泊三日という短い時間であったが、もともと全く見ず知らずであり国も異なるわたしたちが、まるでひとつの家族となったかのようであった。ホームステイ先を離れる時、お母さんや兄弟姉妹たちと別れるのが辛くて、抱き合って涙を流した時の光景が今もわたしの脳裏に焼き付いている。

３．京都、広島などへの旅行、参観によって日本の歴史、文化などを肌で理解することができたこと

京都は日本の古都であり、悠久の歴史を今に伝え日本文化の息吹を強く感じさせるという点においては、その代表的な都市ということができる。京都には多くの旧跡や寺院があり、さらにそれに加えて美しい自然にも恵まれている。

わたしは京都郊外の嵐山で周恩来総理の記念碑に花を捧げた。これも中日友好のひとつの証である。

広島市は重工業都市である。主要な産業は造船と自動車製造であるが、市内においては第三次産業の比率が高くなっている。この町は第二次世界大戦末期に原子爆弾による爆撃を受け、壊滅した。その後、広島市は平和都市の代表となり様々に力を発揮してきた。原子爆弾投下時の爆心地にある原爆ドーム遺跡と平和公園内に建てられており、原子爆弾投下による惨禍を示す各種の実物資料を収集展示しており、原爆ドーム遺跡とと

もに広く世に知られている。

4．今回の短期訪日全体を通して感じたこと

今回の訪日中、わたしは日本人の親切、朗らかな性格に加えて彼らがよく社会公徳心を備えていることを強く感じさせられた。彼らは非常に暖かくわたしたちをもてなしてくれ、自分のほうからあいさつをしてくれ、路に迷った時には大変熱心に導いてくれた。サービス業に従事する人たちの業務態度やそのサービスの質は超一流である。

人々は時間に正確で、公徳心があり、電車の乗り降りにも秩序があり、公共の場所は静粛に保たれている。また自然環境も安寧静粛で美しい。

今回の訪日全体を通してわたし自身の日本語運用能力にもさらに磨きをかけることができた。また、今回日本の生活を自分の目で見、感じることで、多くの教室的知識以外の成果を得ることができた。すなわち日本の風土、人情、風俗習慣について肌で感じることができたように思う。

日本の青年たちとの交流を通して、わたしの専門分野に関しての理解もより一層深めることができた。そのことは今後のわたしの教員生活に実体験に基づく貴重な資料を提供することになろうと思われる。わたしは今回の訪日で学んだことや得られた体験を今後の実践に生かしていきたいと考えている。

参加報告書

湖北省黄石市　湖北師範学院外国語学部　　程　元益

今回、日本国際協力事業団が実施した中国青年招聘計画は楽しく充実した２１日間のスケジュールで終わりました。私は幸いにこの計画に招聘されて日本に友好訪問をして多くを得ました。

まずわたしたちが感心しなければならないのは日本人が用意周到であるということです。これは招聘計画の初めから終わりまで感じられます。北京での現地説明会のとき、各関係者の講演、説明、訪日スケジュール、各注意事項および現地説明会の詳細と注意事項は全てとても詳しいものでした。北京でも日本でのスケジュールを説明してくれましたが、私たちが日本に到着したあと日本側のスタッフは再び資料を配り、説明したうえで、当日の活動が終わって私たちがホテルに戻っていたとき、また翌日の活動を詳しく説明しました。最初はくどいと思っていましたが、すぐそう思わなくなりました。スタッフのやり方は他人を安心させると感じました。たぶんスタッフは「ちゃんと分かるように知らせる」よう努力していたのでしょう。その中から日本人のある精神を感じました。それは絶対に間違いのないように一生懸命に努力するということです。これと比べて自分自身が恥ずかしいと思います。私はよく「大体出来た」などで自分を許します。

逗子での合宿セミナーも私に深い印象を残しました。日本の教育者と直接交流できて本当によかったです。私たちの中国人の日本語教師は日本各校から来た先生と教育関係の問題について検討し、自分の思いを発表し、意見を交換して、お互いに参考になる解決方法を提供する中で、交流するうちにどんどん友情を築きました。人と人とのコミュニケーションで理解が深まり、誤解が解ければ、国と国との交流でも理解が深まり、溝が埋まって友好関係が築かれるでしょう。このような友好活動を長く行っていけばいいと心から望んでいます。

もちろん、教育者として私たち日本語教師は教育から離れてはいけません。このため私たちはいくつかの教育関係の機関を見学しました。その中で私たちは自分と違う教え方を見学しておおいに啓発されました。私自身が大学時代に日本語を勉強したとき、聴解の授業中、一回でテープの内容が分からなければ、先生はテープを早戻ししてもう一度聞かせますが、３回か４回聞いてもやはり分からなければ、先生はそのスクリプトを教えます。しかし、ここでは違います。見学した授業はちょうど聴解の授業でした。テープの内容は易しかったのですが、学生は日本語のレベルが低いためか、何回聞いてもやはり分かりませんでした。先生は根気強く補助的な説明をして、生徒に何回も聞かせました。そのスクリプトを最後まで絶対に言いませんでした。先生が人を教え導いて倦まない精神は私には忘れられません。私の大学時代に受けた教え方と比べて、ここは学生が積極的に考える習慣を養成できて有意義でしょう。この科学的な教育方法は私の参考になりました。自分の授業で生徒に何かを直接言う前に、生徒に自分の頭でもっと考えさせ、もっと互いに検討させます。そうすると学生はもっと日本語に興味を持って、もっと上手になるでしょう。

この招聘計画の各活動の中で一番忘れられないのは沖縄でのホームステイです。短い

２、３日間でしたが、ホームステイ先の主人が親切で客好きなことで、私に深い印象が残りました。ホームステイに行った初めの時、ちょっと緊張していましたが、すぐリラックスしました。ホームステイ先の家族はみんな親切で、私を家族の一員としていたからです。私はおいしい日本料理も食べられましたし、沖縄の歴史と文化をたくさん知ることが出来ました。日本語科を卒業し、日本語を教えている私にとっては、ホームステイを通して日本の家庭を知り、日本の社会を知って、それからその知識を利用して日本語教育に応用することに役立つでしょう。日本に行く前、日本の普通家庭で和室に直接ふとんを敷き、就寝することを自ら体験できると思っていましたが、行って初めて今は日本でも洋室にベッドを置く家庭が増えてきていることがわかりました。また日本の家庭では、家族の何人かが順番にお風呂を利用しますので、先にお風呂を使った人が、後に使う人のために決してお湯を汚さないよう配慮していると言われましたが、今はそうではありません。家族はそれぞれお風呂を使い終わってから水を流します。後にお風呂を使う人は別の水を使います。社会は発展して変わっていくということを生徒に教えなければならないでしょう。

ホームステイは短かったですが、友情は深いです。ホームファミリーの石川夫婦は息子さん二人と娘さん一人がいます。2000年にも中国の青年教師を招待したことがあります。石川夫婦はその男性の青年教師を「三男」と呼んで、私を「四男」を呼んでいました。ホームステイが終わって私たちがバスに乗って移動する際に、みんな名残おしく涙も出ました。この友情は私個人とホームステイ家族の友情であり、中国と日本の友情であると思います。それに私は中日のこの深い友好を永遠に保っていこうと思います。

実際に広島と京都を含めて日本でのあらゆることが深く印象に残りました。しかし、それぞれすべて書くのは無理です。JICAと中国科学技術部がこんな珍しいチャンスをくださって感謝申し上げます。それから各関係者のスタッフ、ホームステイの家族にも心から誠に感謝申し上げます。

終わりに、中日友好が永遠に続いていくことをお祈りします。

二十日間・二十年・永遠

湖南省長沙市　中南大学　　鄧　　牧

２０日間は人生にとってほんの一瞬かもしれないが、2002年１２月のあの在日訪問の２０日間は、私にとって一生忘れられない記憶になると思う。私の初めての日本、初めての日本での授業、初めての日本の人々とのふれあい・・・。もう心に深く刻み込んだ。「北京でのオリエンテーション、東京での講座と見学、神奈川での合宿、沖縄での１週間の滞在、広島平和記念公園、京都見物、東京での送別会・・・」２０日間の活動はとても豊富で有意義だった。

「ああ、かわいい！」

これは私の日本に対しての初めての印象。飛行機から見た日本は緑いっぱいで、道路が細かく切られたみたい。そしてとても整然としてはっきりした感じ。本当にドラマで見たのと同じなんだ。ここは日本なんだな。中国と違って市内の大通りも狭いような気がする。それに応じて建物も部屋も小さな感じ。とても小さくて器用に見える。かわいいな。中国のバーッとした物を見慣れた私にとって、また別の風格だと思う。何もかも小さくてかわいいし、そしてとてもきれいなんだ。こんなものを見て、こんな所に来て、嫌いになる人は多分いないでしょ。私だって本当に好きになった。ここからも、日本人の小物への愛着を理解できるようになった。

「まあ、おいしい！」

日本で最初のご飯は、ＴＩＣ（東京国際センター）で食べたの。うん、何を食べたって。あ！セットね。そして初めて本場の味噌汁を食べた。こうお箸で少しかき混ぜてまた飲むと、おいしい～！

あとの訪問先でもいろんなものを食べた。本当に自分も不思議だと思うのは、日本に来て抵抗を感じたものはまったくない。納豆もおいしい、おいしいって食べた。ただね、私、湖南出身なので辛いものが大好き。だから日本のどこへ行っても必ず「ドウバンジャンがありますか」と聞いた。その後コーディネーターの小川さんが、いつもドウバンジャンを持ってきてくれて本当に助かった！　ありがとうね。

さて、私が日本で一番おいしい料理は何と思うのですか。「ラーメン」よ！　本当にラーメンが好き！　自由活動の時間、私、だいたいラーメンを食べた。中国よりずっと大きなお碗においしそうなラーメンがピカピカと輝いて、おいしいよ。本当！　そして中国にもラーメンがある。味も材料も違うと思う。機会があったらぜひ食べてもらいたいね。同じようにおいしいからね。

「あ～、皇居が好き！」

日本に来て、銀座、新宿、池袋を回った。都庁からきれいな東京の夜景も眺めた。超高層ビルがびっしり立ち並んでいて、日本は本当に現代的だなと思うが、あんまり強い印象とか感動とかそんな気持ちはない。でも皇居であの黄色くてきれいな銀杏の木やも

のすごく広い空地が目に入った時、「あ、こここそ日本なんだな」と思った。白い砂でできた広場、二重橋、こんなに狭くて息苦しくさせ感じる東京に、こんな広い場所もあるなんて、何かすごいなと思った。ここには天皇たちが住んでいらっしゃるのね。広くて緑いっぱいで、またかわいい形の松があちこちにあって、本当にね、人情味あふれて、とてもやさしい感じがする。だから東京で皇居を見た私はとても感激の気持ちで、本当に好きだった！

「合宿は最高！」

もともと合宿も私、一番楽しみにしていた活動。そして今度は神奈川の逗子マリーナ（何か川端康成がここで自殺したと読んだのだけど）で行うことになった。いいな。生まれて初めて海を見られるんだ。毎日１次会、２次会（カラオケ）、３次会もあった。すごく楽しかった。日本の先生たちと一緒に話し合ったり、歌ったり、飲んだりして、皆は心を開いて話し合うことができた。

日本と中国の教育方式、問題、日本人から見た中国・中国人、中国人から見た日本・日本人などいろいろ話した。日本の先生たちは皆やさしい方ばっかりで、そして自分自身もすごい才能を持っている感じがする。先生たちの話から先生の仕事ぶりを感じたり、理解したり、同じ意見になったりして、本当に国境がなくなって、同じように考えするようになった。そればかりでなく、人生への考え方や、困ること、哲学的なことまでけっこう盛り上がって話し合った！

こんなに遠く離れた別々の国なのに、考え方が似ている。願いが同じ。だから心がとてもとても近くなったような気がする。それもありがたくてこの上なくいいことじゃないかしら。

父のようにやさしい言葉を話してくれた佐藤先生「私の人生はもう短い。でも鄧さんの人生はまだまだ長いですから、がんばって！」。同じグループの田中先生、伊川先生、郷先生など私たちは豊かな成果を得たね。討論の時、いろんなことについていろいろと話してくれ、教えてくれた山崎先生、私たちはもうすぐ別れますよね。２日間は本当に短かったね！　私だって本当に皆と「さようなら」を言いたくない。言いたくない。

日本で初めての別れ、日本で初めての涙。日本の神奈川の先生の方々、どうか元気でね。元気でいらっしゃい！　私は中国から祈りますから、いつまでも。

「沖縄の子供たちは元気ですか」

いよいよ沖縄の旅を始めた。日本のハワイ！　飛行機で３時間ぐらいかかった。本当にコーディネーターの小川さんと岳さんの言ったとおり、沖縄の建物、料理も中国と似ている。すごく親しみやすい感じだった。特に沖縄の人々の情熱と親切さが印象的だった！

今、一番懐かしいのは上山中学校の２年５組の子供たちと一緒に過ごしたあの朝。踊りのドラム、伴奏、あと子供たちが歌ってくれた「島人の宝」が今も目の前にあるように覚えている。子供たちは大きな声で朗読したり、大きな声で歌ったり、大きな声で「先生、僕の名前、覚えてる？」と言ってくれた。

本当にいいな、皆元気いっぱいで！

皆さんは元気ですか。中国にいる私は皆のことが気になっているわよ。

「うちの四女なんだよ」って

「私たちは沖縄のお父さん、お母さんよ、ムーちゃん」そう言ってくれて私は本当に感動した。玉寄家のお父さん、お母さん、３人の美人お姉さんの利沙、麻紀、沙紀子と弟・哲志はね、とてもとてもやさしい人ですね。私のことをお客さんでなく、自分の家族として扱ってもらってホムスステイもとても楽しかった！　私たちはもう約束した。私いつかまた沖縄へ行く。お父さん、お母さんもいつか中国に遊びに来てもらう。

「戦災者の悲しみ」

日本の招聘事業で日本へ行く人が必ず行くところは広島なの。私も例外なく行った。その日は曇り、雨も少し降っていた。「広島平和記念公園」の雰囲気にピッタリだと思う。あまり時間がないので一遍回っただけだ。でも衝撃的で印象的だった。何と言っても原子爆弾一つで全広島がこの世から離れたようで、２０万人ほどの人が亡くなった。何と悲惨なことでしょう。

「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから」

記念館を回った時、アメリカ、韓国の人々の姿も目に入った。もっともっと世界中の人々に知らせていいな。中国の南京、ドイツのユダヤ人の記念館ももっと多くの人に来て、見て、分かってもらいたいな。だってそうして初めて亡くなった人は安らかに眠ることができ、また過ちも繰り返しませんから！

「さようなら、親愛なる日本友人の皆さん！　さようなら、日本」

２０日間の在日訪問はもうすぐ終わる。皆さんはどんな気持ちですか。私また泣いちゃう。どうしよう。この間、コーディネーターの小川さんと岳さん、国際善隣協会の八島先生、久恒さん、また沖縄青少年県民協議会の大城さん、川平さん、金城さん、そして今まで出会った多くの日本の友達。何も分からなくて、そして少しわがままの私を守ってくれて、ありがとうございます！　いろいろとご迷惑をおかけしてしまった。ごめんなさい！　本当に、本当にお世話になりました！　ありがとう・・・。

２０日間の思い出は２年経っても２０年経っても変わらないと思う。またこの２０日間で結びついた友情も続けさせようと思う。私の宝物として、永遠に！

報　告　書

湖南省長沙市　長沙外国語学校　　易　阿丹

あっという間に日本での研修生活の３週間が過ぎてしまいました。ほかの１９名のメンバーは「日本にいた日々はどんな３週間だったでしょうか、いちばん心に残ったことは何だろうか」と心の中でよくわからないようですが、わたくしにとっては振り返ってみると、本当に多くの経験をした３週間でした。いちばん心に残ったことは帰国後も参考にできることです。

実施団体の方々はいろいろ工夫して、本当にいいスケジュールを立ててくださいました。鎌倉市立第一中学校や沖縄県上ノ山中学校などでの先生がた及び生徒たちとの交流を通しての実施研修は、わたくしにとってたいへんいい経験になりました。最も印象深いのはチームティーチングという授業方式です。たとえば英語の授業で、一人のアメリカ人あるいはイギリス人の外国人の先生と日本人の英語の先生がいっしょに授業をします。生徒たちは何かこまかい文法的な質問がある時には、外国人の先生が説明したのでは、はっきりわからないことがあります。その時は日本人の先生が通訳することができます。また練習する時は、少人数で生徒たち一人一人の発言のチャンスが倍になります。これもチームティーチングの利点だと思います。

もう一つは相談室です。生徒は特に中学生と高校生は、悩みを簡単に解決できない場合があります。その結果、勉強に支障をきたすことも考えられます。そのような時、相談室で専門の先生に相談ができます。今の中学生と高校生は友人関係、進路などについて悩んでいます。中国の学生にもそういう悩みがありますが相談室というようなシステムがありません。今後、中国でも必要になると思います。

最後に、もう一度ＪＩＣＡの方々をはじめ今回の研修にご協力くださった皆さまに心よりお礼を申し上げます。このように貴重な経験をさせてくださった皆さまがたに、私は心から感謝しています。

訪日報告書

甘粛省蘭州市　蘭州大学外国語学院　　王　秋萍

平成１４年１２月１日から２１日まで、私たち中国青年海外協力隊日本語教師２０名は日本へ研修に行って、日本の歴史、社会と教育を学びました。東京や沖縄など日本の各地で、色々な体験ができて、すごく楽しい研修でした。この研修はいつまでも忘れられないと思います。

一番羨ましいところ：よく降っている雨、どこでも見える緑と美味しい空気

日本へ来る前に、日本は非常に綺麗で静かな国だと友人が言ってくれました。でも、やはり日本の綺麗さに驚きました。どこへ行っても緑の木と芝生が茂っていて、可愛いお花が咲いていました。そして不思議なことに、日本でのはじめての朝に３０年ぶりにカラスの鳴き声で目が醒めたのです。

最初、日本は海に囲まれてそしてよく雨が降りますから、緑が多くて、埃が立たないのは当然のことだと思い、日本の美しさは自然の恵みにすぎないと思っていました。後日《日本戦後発展史》という講義を聴きました。講義を通して、日本が６０年代日本経済高度成長時期には“公害先進国”とまで呼ばれ、公害がひどかったということを知りました。その時代に大勢の人が「イタイイタイ病」などの病気にかかって、苦しんでいたということも聞きました。すると私の考えも変わりました。ただ自然条件がいいだけでは今のような日本になれないと身にしみて感じました。人間は努力しなければならないのです。

私の沖縄のホームステイ先の上原様のお宅は屋根まで芝生を植えていました。そして、ごみを減らすために、自分のうちで自分が処理できるごみをなるべく自分で処理しています。上原様は果物の皮などを発酵する大きなバケツを見せてくれました。

もし借りることができれば、私は日本から「雨、緑と美味しい空気」を借りて、故郷の蘭州まで持って帰りたかったです。逗子合宿セミナーの２日目に雨が降ったのですが、その時に傘を差してくださった佐藤雪丸先生にこの話を冗談のように言いましたが、佐藤先生はすぐ「どうぞ、たくさん持って帰ってください。」と答えてくれました。これができないことだと自分ははっきり分かっていますけれども、その時自分の感情を押さえきれずについ口に出してしまいました。実物の「雨、緑とおいしい空気」はどこからも借りられないのですけれども、自然環境を大切にする精神を学ぶべきではないかと思っています。私は「山紫水明の蘭州を造りなおす」ために、微力ですが力を尽くしたいと思います。自信を持って一生懸命仕事をしたり勉強をしたりすれば、蘭州のような公害のひどい都会も生活しやすい綺麗な町になると確信しています。

一番好きなところ：沖縄

１２月９日に私たち一行は雪が降っていた東京から沖縄へ行きました。那覇空港に着いたとたんに沖縄の気候の暖かさを感じました。着いた日の夜に沖縄側は盛大な歓迎パーティーを催してくれました。そして、ホストファミリーと初めて会ったのもこの日

の晩でした。まだ日本の家に泊まったことのなかった私たちは不安でいっぱいでしたが、私たちが造花をつけて宴会場に入ったとき、ホストファミリーの皆様は熱烈な拍手と親しい笑顔で迎えてくださいました。私はすぐに沖縄人の親しさと朗らかさを感じました。そして沖縄へ来る前の不安はなくなりました。この時から、もう沖縄が好きになりました。自己紹介してから３日後のホームステイ先のご家族と一緒に話しながら、食事をしました。私を迎えてくれたのは上原ご夫婦でした。三人で手を初めてつなぎました。

１２月１３日午後２時に各ホストファミリーはご自宅まで案内してくれました。一生忘れられない幸せな３日間でした。「熱烈歓迎　王秋萍せんせい」と書いてある赤い紙を止めるための赤いハート形の画鋲を見た時の嬉しさ、沖縄人の好きなシーサ（沖縄で瓦屋根にとりつける素朴な焼き物の唐獅子像、魔除けのため）と「石敢当（沖縄で道路の突き当たりや門、橋などにこの３文字を刻んで立ててある石碑）」を見た時の喜びは、本当に言葉で言い表すことができません。特に後者。これを見たときすぐ３０年前自分の家の屋根の上に立っていた「泰山石敢当」の石碑を思い出しました。ここで子供時代のことを思い出せるとは夢にも思わなかったのです。

私が沖縄の民俗を理解できるように、上原ご夫婦は沖縄の結婚披露宴に私を参加させてくれました。新郎様のお父さんは沖縄県の議員先生で、新婦様のお母さんは沖縄舞踊の名人ですから、とても盛大な披露宴でした。お祝いのお客様は４００名を超えたという話です。披露宴の内容は中国と似ていますけど、沖縄県の結婚披露宴はよく夜に宴を張るそうです。これは中国と違います。東京とも違うそうです。中国は普通午前に宴を張ります。そして新婦様のお母さんの関係で、有名な琉球舞踊も見ることができました。とても楽しかったです。上原ご夫婦様、このような珍しい機会を提供してくださって、誠にありがとうございました。

そして永遠に忘れられないのは、沖縄でよく聞いた、沖縄人ならだれでも知っている「いちぇーわ　ちょーでー（出会ったら皆兄弟）」という言葉です。これは素朴ですが、しかし立派な言葉です。世界の人々は国別を問わず、肌の色を問わず、皆が本当の兄弟になればと私は思っています。那覇空港はまだ私達のつらかった別れの涙を覚えているでしょう。「別れても好きな私の沖縄のうち」「別れても好きな沖縄」。いつかまたきっと行きます。待っててね。

一番大切な目的：授業見学

今回、全部で４回ぐらい授業を見学いたしました。感動させられたのは日本国際交流基金での授業と沖縄キリスト教短期大学での授業でした。特に沖縄キリスト短期大学の上原明子先生ご担当の授業。とても楽しく日本語の勉強ができました。上原先生のご授業は日本の伝統的な紙芝居でした。授業中、生徒達は絵を描いたり、お互いに練習しあったりして、過ごしました。この授業を通して私の視野は広がりました。そして私もこのような楽しい雰囲気の中、日本語を教える方法を今後の授業で活用したいと思いました。

次の日本国際交流基金での授業は私に良いアドバイスをくれました。先生はまず日本語を教える日本人の先生と外国人の先生それぞれの短所と長所を具体的に分析しました。これから私はどういうふうに日本人の先生と協力すればいいか、ちょっと分かったような気がしました。それから先生は止まってはいけない、時代の発展に従って、絶えず勉強しなくてはいけませんとおっしゃいました。一冊の教案は一生は使えないのです。先生、本当にどうもありがとうございます。先生の話を聞いて、自分のことを思い、これ

から勉強すべきことがまだたくさんあることに気づきました。本当に勉強になりました。

研修で一番よかったこと：兄弟のような皆さん

今回の研修の参加者は中国の各地から集まったと言えます。一番北はハルピンで、一番南は貴陽で、一番東は無錫で、一番西はウルムチです。来る前にはお互いだれも知らなかったのです。でも研修中はみんなで助け合い、兄弟のように仲良くして、お互いを深く理解することができました。そしてＪＩＣＥ（日本国際交流センター）の小川寿美子様と岳光様がお姉さん、お兄さんのようにお世話をしてくださったおかげで、充実した研修が実現しました。ありがとうございました。

2003年1月8日

報　告　書

貴州省貴陽市　貴州大学日本語学科　　羅　　華

私は1996年から大学で４年間日本語を勉強し、卒業した後そのまま母校に残って日本語教師になりました。つまり合わせて６年間あまり日本語を勉強してきました。この６年間、私は先生やいろいろな本から日本についての知識を学び、自分の頭で日本の姿を築きました。そしてその姿を学生に語ってきました。しかし、それはほんとうの日本にピッタリかどうか、いつも心細かったです。したがっていつか日本に行って、自らの手で確かめようと思うようになりました。

ようやくこのチャンスが来ました。今年の１２月１日から２１日にかけて、私は日本青年海外協力隊員が派遣された先の地元の日本語教師として日本へ訪問研修に行くチャンスに恵まれて、日本で３週間の短期研修を行いました。

短期間ながら、今度の訪問研修を通じて私はいろいろな人に出会い、楽しい思い出を作ったばかりでなく、今までの知識を確かめて大変いい勉強になりました。

出国する前の申込書に私は「日本へ行き、この目で見たこと、この目で感じたこととこれまでの勉強してきた日本についての知識とを比べ、より真実な日本の姿を学生に伝えたい」と書きました。この目標は一応達成できたと思いましたが、意外にもっと大きな収穫を得ました。

私たち第１７陣中国青年訪日団・日本語教師グループ一行は、沖縄県青少年育成県民会議に招かれて沖縄県へ行きました。沖縄県公文書館で私たちは孫薇という中国からの博士に会いました。彼女は1987年、２５歳の時初めて日本へ短期訪問に来たということです。それをきっかけにし、再び日本へ留学に来て、今は沖縄県公文書館に勤めているらしいです。

「その時の訪日は私に大きな影響を与えて、私の人生もそのときから変わってきた。皆さんもだいたいその時の私と同じ年なので、今度の訪日も皆さんの人生の転機になって欲しい」と孫薇博士はそう言ってくれました。

しかし、どういうわけか分かりませんが、私たちの中に「そのとおりだ。私もさっそく日本に留学しよう」と考えている人はあまり多くないようです。日本に対する印象があまり良くないからでしょうか。そうではありません。日本側の関係者は誰もが親切にしてくださったし、さすがに先進国なので、団員一人一人も日本の進んだ各方面に非常に感心しました。それに加えて、いいところに行きたいということは、もともと人間の本性でしょう。ではいったいなぜわれわれは孫薇博士と同じような感想をしなかったのでしょうか。

泊まったところに帰ったあと、私はつくづく考えました。原因はいろいろあるはずですが、要因はひとつしかないと思います。それは中国の発展です。

1986年１１月から1990年は、日本の景気拡張時代でした。一方、中国は改革・開放の道にたどったばかりで、1987年の一人当たりＧＤＰはわずか1,104元でした。そんなに貧しい国から非常に豊かな国へ行ったとき、受けたショックの大きさは考えられるでしょう。それに引き換え日本は1997年３月から景気後退期に入り、その不景気は2002

年の現在まで続いていますが、一方、中国は1992年から8％前後の経済成長率ペースが続いています。ＧＤＰも1987年の1兆1962億元から2001年の9兆5933億元に成長してきました。

要するに、日本と中国の経済上の差はだんだん縮まりつつあるということです。2002年の現在、中国から日本へ行った中国人の目に映った日本はたぶんこれまでの高嶺の花ではなくなったでしょう。これは、私たちが初めての訪日でもすごくショックを受けていなかったとことの要因ではないでしょうか。

これはある程度にいいことだと言えるかもしれません。日本での中国人留学生の中には、日本は進んだ国なので、日本に留学すればお金が儲かるかもしれないという経済的な理由にかられて留学にいった人も少なくありません。進んだ日本に留学し、優れた技術を学び、帰国して中国の発展に尽くしたいと思っている留学生像が教科書などでよく見られますが、現実の世界にあまりいないのも否定できない事実です。「いいところに憧れる」のは人間の本性であるけれども、それだけでは留学の真の意味を見失っていると思います。両国の交流の面でまったく役に立たないとは言えませんが、やはり望ましくないことでしょう。

中国から日本やアメリカなどの先進国へ留学や研修に行った中国人は大勢います。そのまま帰国していない人も少なくありません。これからはその人たちを中国に戻るように引き付ける方策がもっと重要になるのではないかと思います。

いま、中国では外国で修士か博士学位を取って帰国する人に優遇を提供する政策がありますが、そのような人たちを帰国させるのに優遇策はもちろん不可欠ですが、全国経済の発展はもっと重要だろうと思います。

もちろん真の意味を持つ留学を促すには、けっしてどこかの国の経済衰退とどこかの国の経済発展を前提にしてはいけないと思っています。ただ一人の教師として、自分の経験をもって学生と周りの人たちに本当の留学はどういうことか、本当の友好の掛け橋になるのに何が必要かということを伝えたいのです。

注：本報告書の中で書いた「経済的な理由にかられて留学に行った」とは孫博士のことを指してはいないのです。

訪日報告書

河南省洛陽市　河南科技大学　　閻　留強

昨年、日本国際協力事業団（ＪＩＣＡ）の招聘を受けさせていただき、中国大学機関の日本語教師の一員として、２００２年１２月１日から１２月２１日まで日本での三週間の短期研修に参加してきました。

外国語を専門とする者にとって、対象国に行って、その雰囲気を体験することができることはうれしいことです。わたしも例外ではありません。そうすれば自分の日本語の聴力と会話の能力を高めるだけでなく、日本への理解を深められると思いました。以前、わたしの印象の中で、日本は物質文明が高度に成長し、国民はみんな裕福で、社会秩序がよい代わりに人情が欠けている国でした。それで日本に行く前、日本ではできるだけ見たり、聞いたりして、本当の日本を体験したいと決心しました。日本での滞在期間中、日本国際協力事業団と協力機関の厚い招待を受けていただいて、研修生活を楽しく送ることができました。

さて、今回の研修の内容は主に都内（東京都内）活動と地方（沖縄）活動に分けられていました。

まず、都内活動について話をしたいと思います。東京では私たちは東京国際研修センターに泊まりました。私たちのために日本国際協力事業団は、日本についての二つの講座を開きました。それは神戸大学経済学部教授・石原享一先生の「日本と日本人」と東京学芸大学教授・牧野文夫先生の「戦後日本の歩み」でした。講座を通じて、日本の歴史と現代の理解を深めることが出来ました。たとえば日本の東部の人と西部の人と経済価値の理念が違っていること。現代日本教育の「三大問題」として、基礎学習能力の低下、校内暴力、不登校があることなどです。

１２月４日、国際交流基金日本語国際センターを訪問しました。そこで教室や自習室や図書館などを見学して感心しました。世界中の日本語に関係があるあらゆる本と辞典がここに集められているそうです。このセンターで２、３カ月研修ができれば、必ず大きな成果が取れると思いました。惜しかったのはその応募手段が分かりません。

暇な時、ほかの団員と一緒に市内見学をしました。東京のにぎやかな様子は言うまでもないですが、どこも人がいっぱいだけれども、秩序がよいです。デパートでのショッピングも気楽でした。日本では、直接店員にお金を渡し、店員は包装した品物とレシートを（おつりのある時はおつりも）一緒にしてお客さんにわたします。店員は丁寧な言葉や態度でお客さんに応対してくれます。これは日本人の考え方の中にはお客さんは「買ってやる」、店の人には「買ってもらう」という意識があるからです。

次は、地方活動について話をしたいと思います。地方活動の場所は沖縄で、きれいなところでした。私たちはここで大学や中学校を見学したり、世界遺産に登録した首里城を見物したりしました。そして１２月１４日午後から、ホームステイが始まりました。私たちは、それぞれの家庭に連れて行かれました。私のホストファミリーは佐渡山春子さんという方で、今年ちょうど６０歳で、具志川市に三男と一緒に住んでいました。私は彼女のことを「春子母親」と呼びました。「春子母親」の家に小さい魚がたくさんいて、

ほかに「風」という犬も一匹いました。そして庭には私の知らない花が植えてありました。佐渡山さんは当日の夜、パーティーをしてくださいました。おいしい料理を作るばかりでなく、親戚や友達が遠くから歓迎にきてくださっていました。食事後、沖縄の「泡盛酒」を飲んだり、話をしたりしました。私は中国や洛陽のことについてできるだけ詳しく紹介しました。向こうも中国に興味を持つ問題をたくさん尋ねてきました。この座談会は夜遅くまで続きました。

翌日、「春子母親」について、世界第二と呼ばれている沖縄水族館を見物しに行きました。ほんとうに面白かったです。夜、二人でいろいろ話しました。彼女は定年後、生活は豊かではないが充実していると話していました。「春子母親」は、いま近くにある生徒指導センターでボランティアとして活動をしています。ほかに仲間と茶道や花道などをして、有意義な余生を送っています。私はこの時、中国の老人生活を思い出しました。現在中国では、一般的に男性の定年の年齢は６０歳、女性は５５歳です。私の両親はもう定年して、今は仕事をしていません。何もしなければ退屈することになりますし、気力がなくなってしまうこともあります。そんなお年寄りが私の身の回りには少なくないのです。今回沖縄に来てお年寄りが元気に働いているのを見て、一つのヒントを与えられました。

東京に戻る日に、大部分のホストファミリーが空港まで送りにきていました。この送別の雰囲気で多くの団員がホストファミリーと抱き合って、涙を流していました。この友情を中国に伝えていきたいと思います。

最後に、このチャンスをくれた日本国際協力事業団ならびにお世話になった方々へ心より感謝の意を表します。

日本訪問について

新疆ウイグル自治区ウルムチ市　新疆師範大学外国語学院
アイヌール（阿依努尔）

私は今回の訪日日本語教師団に参加させていただいた新疆師範大学外国語学院の日本語教師です。はじめに、このたび日本側の国際協力事業団が訪日のチャンスを与えてくださったことに、心より感謝申し上げます。

次に、今回の訪問についての感想を簡単に述べさせていただきます。

私たち日本語教師団は、団長、記者及び中国全土からの日本語教師１８人からなっております。１１月２９日に北京に集まり、２日間の出発前研修において詳細で役に立つ説明や紹介などを学びました。そして１２月１日に胸を躍らせながら、長い間あこがれていた日本に無事に着きました。

日本に着くと、次々といろいろなことを感じ始めました。環境がきれい、景色が美しい、道路が狭い、人々が忙しい、優しい、物価が高い、仕事や自分のすべきことに細かい（真面目）、時間や規則にきびしいなどです。

まず、３日間の共通活動を通して、日本についての理解をもっと深めました。学校訪問や合宿を通して、日本の教育の現状や中日両国の学生の違いや外国語を習得するいい方法などについても、ある程度参加者同士お互いに話し合いました。それから地方訪問の活動（沖縄）を通して、日本人と分かり合いありのままの日本人と接触することができ、短かったけれども忘れられないホームステイの時間を過ごせ、いろいろいい思い出を作ることができました。その他、３日間の旅行でこれまでテキストやテレビのニュースなどで読んだり、見たり、聞いたりしていたことを、ひとつひとつ自分の目で見て確かめ、知見をもっと深めることができました。

今回の訪問は、私たちに日本についての理解を深め、新しい教授法を学び、日本人との関係をもっと友好的にするチャンスを与えてくれました。それに私たちだけではなくて、日本側の皆さんが中国を正しく知ってもらうという点でも一定の役割を果たせたとも思います。

合宿の時、ある日本側の先生が、私たちの「中国人は親元から遠く離れたところにいるときは、手紙を書いたり電話をかけたりする。」という話を聞いて、とってもビックリしていました。なぜかというとその先生は中国人の心の中に共産党だけがあって、親や家族や親戚などは全然存在していないと思い込んでいたからです。その話を聞いて「なぜその先生はそのように思っていたのだろう。」と私たちはもっとビックリしました。

それはきっと中日両国の人々の間の相互理解が、まだ欠けているからだろうと思います。ですから、まず国と国ではなく同じ人間という立場から人と人との理解を深めれば、その積み重ねによって国と国との理解ももっと深められるのではないかと思います。

今回の訪問によって、いろいろいい経験ができました。東京の高いビルや狭い道、若者たちの（私の目から見て）変な着こなし、人々の忙しさ。沖縄のすばらしい自然、優しい人々。たった３日間だけの短い時間でしたが永遠に忘れられない深い印象を残してくださったホストファミリーの宮城さん御一家のお父さんとお母さん、私の故郷では絶

対に見られない海、京都のきれいなお寺など、そして２１日間ずっとそばにいて私たちを助けてくださったコーディネーターの岳光さんと小川さん。そのひとつひとつ、ひとりひとりが永遠に忘れられない、すばらしい、懐かしい思い出になりました。

最後に僭越ながら一つだけ私の考えを申し上げたいと思います。

私たちは日本語教師ですから、やはりどんなことも日本語だけを使ったらもっといい勉強になったのではないかと思いました。でも残念ながら今回はいつも中国語の通訳がついていたので、言葉の面ではあまり勉強にはなりませんでした。ですからこの点を今後はすこし変えていただけないでしょうかというのが私の考えです。

簡単ではありますが、以上で終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。

訪日しての感想

黒龍江省ハルピン市　ハルピン工程大学外国語学部日独研究室　　蘭　　卉

帰国する前にわたしはできるだけ持っている硬貨を使いました。でも五円の硬貨だけ残ってしまいました。五円の発音と「ご縁」は同じで、神社やお寺へ行く時、自分の願いをかなえるためにいつも五円の硬貨を投げるそうです。ですからわたしにとって、「五円」とはある運命になるめぐり合わせという意味です。いま、四つの五円の硬貨はわたしの机のガラスの下に置いてあります。それを見るたびに、今回の研修で訪問した四つの都市を思い出さずにはいられないのです。

国際的な都市——東京

東京の繁華街を歩いてまず感じたのは、「どこにも外国人がいる」という事です。サラリーマンのような格好をしている外国人もたくさんいます。秋葉原の電気街の店員やわたしの泊まったホテルのボーイさんも半分ぐらいは外国人です。それに日本人が無関心になっていることは、外国人がもうふだんの生活にあたりまえのようにいることになります。いろいろな人種がいて、白人や黒人、また中国人、韓国人ももう東京の生活に溶け込んでその中の一部分になっているようです。東京の国際化が進んでいるのを肌で感じました。

また、もうひとつ目につくのは東京の「女子高校生」です。寒いのにスカートが極端に短く、携帯を持ち、化粧をし、髪を染めている女子高校生がいっぱいいました。でも、化粧をした顔はだいたい同じで、目が大きく、まつげが長く、おしろいを厚く塗り、もし制服を着なかったら、ぜんぜん高校生とは思わなかったはずです。中国の高校生と比べて、日本の高校生のほうが青春を楽しむのが上手です。すっかり咲いている花のように美しいです。本当に羨ましいですが、ちょっと残念なこともあります。みんな少女の純粋さも失いつつあるようです。

人情味が溢れるところ——沖縄

内陸に住んでいるわたしにとって、沖縄はいつまでも魅力がある所です。でも、いちばん印象深いのは沖縄の海ではなく、つまりきれいな自然ではなく、そこに住んでいる親切な人々です。とくにホストファミリーの人です。実はホストファミリー宅へ行く前に、不安な気持ちが胸にいっぱいありました。この不安を取り除いたのは稲福さん一家の温かい笑顔です。

わずか二日間でしたが、わたしは家族の一員として家の手伝いをしたり、一緒にテレビを見たり、楽しく会話などをしました。まるで自分の家にいたようです。最初の不安はぜんぜんなくなって毎日楽しい生活を送っていました。ホームステイ中にもいろんなところへ行きました。水族館や万国律梁館などへ行きました。何もかもがわたしにとって初めての経験でとても新鮮でした。それにわたしを家族の一員として扱ってくれて、とてもうれしかったです。ホームステイを通じて日本人の生活をだんだん理解するようになりました。別れの日、最後に別れの挨拶をした時、手を握って離れた時、涙ばかり

でした。本当に帰りたくない感じがしました。帰りの途中のバスで、家族の熱かった人情や感動を胸に刻まれました。いつかまたここに来たいと思いました。

豊かな歴史遺産がある町——京都

中国で使っている教科書に金閣寺や竜安寺や清水寺などのお寺の名前はよく出ています。ですから京都を見学するという期待で胸がいっぱいでした。観光バスから見る景色はとても美しい。いや、美しいだけではなく、京都は確かに日本と日本人の心を伝える場所だと思います。わたしの一番好きなお寺は清水寺です。清水坂を上ると派手な大門と三重の塔が見えてきました。また清水の舞台に立って、「清水の舞台から飛び降りるよう」という言葉を思い出して、これから一生懸命日本語を勉強していい先生になろうと心の中に誓いました。テキストの中で見た京都の写真は忘れやすいですが、自分の目で見、写真を撮ることで、絶対忘れない経験になりました。

もうひとつ目立つのは、京都は中国の西安をまねて作った町だということですが、京都の町作りやお寺の時代の風格がほとんど完璧な形で保存されています。残念ですが、中国ではこのような建築物をあまり見かけなくなりました。

平和の象徴——広島

広島と言えば、すぐ戦争のことを思い起こしました。原爆ドームと広島平和都市記念碑はわたしに深い印象を残しました。原爆ドームが世界平和遺産として注目を浴びるので、原爆投下の目標になったT字型の相生橋を頂点に広がっていた中島町や材木町など瞬時に壊滅した四町一帯を平和公園とし、その中心に記念碑が建てられたのだそうです。戦争で亡くなった方の名前に刻まれた碑を見て、そのあまりの数に衝撃波が走りました。見学をしながら、原爆の恐ろしさと平和の大切さを実感しました。二度とこのような悲劇を繰り返さず、平和の世界を守っていくことが大切だと思いました。

今度の研修はわたしにいい経験を与えてくれました。日本のことを理解し、日本文化を直接経験して、いい思い出になりました。記念品として、この四つの硬貨をいつまでも大切にしようと思います。それはわたしと日本のご縁です。

ー　日本社会を体験し、日本文化を感じ取る　ー

中国青年日本語教師訪日団　東京に到着

2002年１２月３日『科技日報』（第２面）

本紙東京１２月１日電（特別派遣記者：**陳　丹**、東京駐在記者：陳　超）

中日国交正常化３０周年を記念して日本国際協力事業団（ＪＩＣＡ）が実施する「青年海外協力隊日本語教師招聘計画」が本日、正式にスタートした。中国科技交流センターが組織した中国青年日本語教師訪日団一行２０名は本日、東京に到着し、２１日間の友好交流活動を開始した。

この訪問はＪＩＣＡが初めて中国の青年日本語教師を日本研修に招いたものである。訪日団は、青年海外協力隊事務局、国際交流基金日本語国際センター、早稲田大学日本語国際センター、国際善隣学院、沖縄国際センターなどを参観する。また「日本の歴史と文化」講座の受講や日本の青年との合宿活動のほか、日本人家庭でのホームステイ、広島平和公園等の有名観光地の参観なども予定されている。

この研修を主催するＪＩＣＡでは、日本社会を直接体験し、日本文化を肌で感じ取る一連の活動を通じて、中国の若手日本語教師が日本の教育の現状を理解し、日本的教育方法を自国に持ち帰ることができ、また滞日中に日本語の会話表現力のスキルアップを図ることも出来るとしている。ＪＩＣＡによると本活動の主旨は「日本へ行き、日本を理解し、日本を発見し、日本に学ぶ」であり、これらを通じて日中両国の友好交流が更に前進することを目的としているという。

ＪＩＣＡとは日本政府が設立したＯＤＡと経済技術協力に関する業務を担当する専門機構である。ＪＩＣＡは1982年に北京に中国事務所を設立し、研修員の受入、専門家・青年海外協力隊員の派遣、機材供与など対中経済技術交流及び協力を業務としている。同事務所次長の藤谷浩至氏によるとＪＩＣＡルートで既に１万１千人余の中国人が日本で研修を受け、4,400 人余りの専門家が中国へ赴任し、中国へ派遣された青年海外協力隊員総数も500人近くに達するという。2001年１０月に日本政府が定めた「対中経済技術協力計画」に基づき、ＪＩＣＡは今後の対中協力重点分野として「環境問題など地球規模の問題に対処するための協力」「改革開放支援」「相互理解の増進」「貧困克服のための支援」を掲げている。

友好の橋の建設者

ー東京のＪＯＣＶ事務局探訪

本紙特派員：陳　丹

2002年１２月８日『科技日報』（第２面）

１２月の東京は、やはり晩秋で、冷え込みは厳しい。そんな中「中国青年日本語教師訪日団」の活動は片時も休むことなく、研修・訪問の相次ぐ多忙な日程をこなしている。

３日午後、記者は訪日団一行に同行し、東京新宿の繁華街に位置する青年海外協力隊事務局を訪問し、事業担当者から青年海外協力隊事業の業務内容に関する説明を受けた。

青年海外協力隊事務局（ＪＯＣＶ事務局）は協力隊員の応募・選抜・派遣を一手に担っている。また協力隊員の派遣はＪＩＣＡの発展途上国に対する技術協力支援の主要スキームの一つでもある。青年海外協力隊では毎年２回、発展途上国で（ボランティアとして）働こうとする２０歳から３９歳までの青年を広く社会から公募しており、派遣期間は２年が原則である。ボランティアは一定の技術と熱意を有し、事務局による試験、面接により健康状態、語学適応力、人間性などの面で合格とされた若者達で、合格後は７９日間の派遣前訓練を受ける。訓練の内容は外国語学習、スポーツトレーニング、野外訓練や各種適応力強化のための講座などで、訓練終了後、事務局によって派遣対象国の要請内容に基づき、それぞれ派遣される。

１９６５年にラオスに最初の協力隊員が派遣されたのを手始めに、JICAは現在７０余りの国と地域に協力隊員を派遣している。中国では現在７０名余りの協力隊員が活動中で、農林水産、加工、土木建設、保健衛生、文教育などの各領域で活躍しているが、うち日本語教師が６割を占めている。今年中国からＪＩＣＡに提出された要請は５０件に達し、うち４６件が既に日本側で採択され、要請採択率は７０％程度とのことである。

派遣されたＪＯＣＶ隊員に対しては現地住民と共に暮らし、働くことで、任国との友好感情と相互理解を高めることをその任務の基本理念としている。これを中国では「三同（共同）主義」と銘打って、現地の人と「共に暮らし」「共に働き」「共に考える」をモットーにしている。ＪＯＣＶ事務局の長谷川次長によると、このような方法を通じて日中両国青年間の相互理解と友好交流が増進され、同時に日本の若者には海外での労働・生活体験の機会を提供し、日本が必要としている総合的な能力を有する人材を育成することにもつながるため、この事業は援助ではなく協力と呼ぶべきものだという。任期を終えた協力隊員は帰国後さまざまな業務に従事するが、そのうちＪＩＣＡに入団して引き続き、国際交流を促し、国際協力の使者となるケースもあるという。

１１月２７日に朱鎔基首相はＪＩＣＡ総裁と会見した折に、今後もＪＩＣＡが中国での協力活動を続けていくことを希望した。またＪＩＣＡは青年海外協力隊員とは別に今年から４０歳から６９歳までの技術と知識を有するシルバーボランティアを中国に派遣することにし、これにより両国の協力・交流面で一層の相互理解と日中友好が進むことを目指している。

日 本 の 印 象

本紙記者：陳　丹

2003年1月11日『科技日報』（第2面）

日本国際協力事業団の招待により、私は中国青年日本語教師代表団の随行記者として2002年12月1日から21日まで日本での友好交流訪問に臨んだ。

わずか21日間の日本行で、この国の政治・社会・経済・科学技術・文化及び自然景観の全貌を理解することは到底出来ないが、それでもこの目で見聞し、肌で感じた内容は、私がこの国の現代化のレベルや迅速な労働とその効率性、自然と文化の見事で精緻な融合、それに礼節あるもてなしと友好的な人々の態度を感じ取るには十分であり、まさに今回の訪問によって私は日本という国をある程度理解した。

滞日中、知り合った日本人から異口同音に尋ねられたのは「日本の印象はいかがですか」との問いである。

日本の印象といえば、まず清潔な環境と澄んだ空気、人口が密集しながらも交通秩序が保たれている都市環境が挙げられる。2002年12月1日、東京に着いたその日は小雨で、空気は殊のほか新鮮で爽やかだった。9日には大雪が降り、その日私達は自習活動日だったので、宿泊先のホテル近在の東京の街風景を見て回ったが、ホテルに戻ってきて気づいたのは穿いていた白のジーパンに一滴の泥のしみもついていなかったことで、このとき私は東京の環境が実にすばらしいことに改めて思い至ったのだった。東京は国際的大都市でありながら、環境維持対策でも極めて秀でている――これこそが私の日本の第一印象である。

日本での施設訪問・見学は多くは専用バスを利用したが、私も同行の団員もつかの間の自由時間を利用し、街に出て日本の都市間ネットワークの迅速性と利便性を実感した。

東京の目抜き通りは北京ほど広くはなく、車道も北京より狭く、また路辺の歩行者はとても多い。自転車専用レーンは設けられておらず、自転車の数自体わずかで、人々は通勤には地下鉄やバス、電車などを主に利用している。都心の新宿駅はラッシュアワーでなくとも人々が大量に行き交い、ひしめき合い、乗降客数は相当なものだが、ホームには乗降場所を指し示すラインが引かれ、乗客はこの線に沿って自然に列を作る。日本では列車の停止線は信頼でき、寸分たがわずその位置でドアが開き、客は流れるように乗り降りし、見事な秩序を保っている。

東京の地下鉄の発車・到着時刻は99％もの正確さを誇っていて、発達した交通ネットワークがスムーズに機能するための前提を成しているのだが、それは同時に日本人の公共道徳を守る良き習慣がもたらした結果なのは間違いない。公共の場できちんと行列を作ることは日本人の長所で、エスカレーターでは誰もがごく自然に左側に立って先を急ぐ人の為に右側を開け、人の流れが悪くなることを避け、路上では車が長蛇の列を作っても耳ざわりなクラクションを聞くことはない・・・。東京は世界でも最も人口が稠密な大都会の一つだと言えるが、私達の眼前に現れた東京は清潔で整然とした姿を持ち、

画然たる条理の中で賑わい、繁栄する姿なのである。

日本の都市緑化もすばらしい。公的スペースに植樹された樹林であれ、自宅の庭の花木であれ、その一本一本がどれも緑にあふれ、見事な剪定が施され、一見すると芸術品に映るほどである。

人にやさしいという点も日本社会の特色である。街を歩けば、興味深くかつ利用者への配慮にあふれたさまざまなデザインに気づくはずである。横断歩道では信号が緑になると同時に小鳥のさえずりが響き、歩行者に信号の変化を知らせる。道路工事では標識と電光の点滅により遥か遠くからでも分かるようになっている。そして工事現場まで来てみると標識には人物が描かれ、工事で迷惑をかけることへのお詫びの他、施工地点、工期、工事請負会社名などが明記され、すぐ分かるようになっている。雨天時に店へ買い物に行くと、店員が客の持つ紙の買い物袋にビニールカバーを掛けて、中のものが濡れずに済むよう気配りしてくれる。これらはごく些細なこととはいえ、人に対する思いやりが汲み取れるのである。

日本人とじかに接してみると彼らの細やかな気配りを感じずにはいられない。日本訪問中、東京であれ沖縄であれ、日本側はどの訪問地でも専門に写真を撮る人がいて私達の様子を撮影しているので、単に保存資料用に撮影しているのだと思っていたが、今回の訪日活動終了時に一冊のアルバムとＣＤ－ＲＯＭを受け取って、初めて日本側が撮影後すぐＤＰＥを済ませ、訪日団員一人一人の為にそれぞれ中身の違う記念アルバムを用意してくれたことを知った。その１枚１枚の写真をめくると日本での活動の様子がまざまざと蘇ってきて、言葉に出来ない感動がこみ上げてきた。

今回の中国日本語教師訪日団の主目的は交流と研修にあるため、日本側は特別に日本の教員たちと私達とが合宿し、共に語り合い交流する場を設けてくれた。彼らから私達は普通の日本人の日常生活を理解し、中日両国の教育システムや方式の差を知ることができた。合宿に参加した日本側の教師は中国側同様、地域も学校も年齢も指導科目もまちまちだったが、誰もが一つの同じ思いを抱いていた。それは人と人とのより多く、より深みのある交流を通じ、中日両国の親睦と友好関係をより強固にし、より発展させたいとの思いである。

厳しい環境で奮闘する中国人留学生たち

本紙記者：陳　丹

2003年1月14日『科技日報』（第2面）

記者は中国日本語教師代表団に随行し、日本での友好訪問期間中、多くの日本の教育関連機関や学校を訪れ、日本の教員や学生と深みのある交流をする機会を得、日本の教育制度や教育の現状に対する理解を深めた。また他に記者は日本留学中の中国人学生とも接する機会を得た。これら中国人留学生の日本での学習と生活もわれわれに深く訴えるものがある。

日本は留学生受入を国際理解と交流推進の一形態と位置づけ、友好協力の一つの重要な方法とみなしている。訪日団の日本滞在中の主な宿泊地は東京国際センターと沖縄国際センターであった。この二つの施設は日本国際協力事業団（ＪＩＣＡ）が開設している総合的な対外窓口機関で、毎年一定数の外国からの研修員を受け入れている。１９８３年に日本は「２１世紀留学生政策」を定め、２１世紀初頭に「１０万人留学生受入計画」を達成する目標を立てた。

2001年５月に公表された数字では、研修生や大学学部生、専門学校生なども含むと日本が受け入れている留学生総数は８万9000人に達しているという。なお、この数字は語学学校の就学生は含んでいない。また日本留学者の９０％はアジアからで、ヨーロッパ（訳者注：欧米を指すと思われる）からの学生はわずか８．３％に過ぎず、しかもアジアからの留学生のうち５６％を中国人留学生が占めるという。代表団は国際善隣学院という日本語学校を見学したが、そこで学ぶ学生は全て中国出身者で、更にその多くがわずか１７，８歳の大学受験を控えた高校生たちなのである。

日本の外国人学生に対するビザは２タイプあり、一つは留学生向けのもので有効期限は２年、もう一つは就学生向けで期限１年である。語学学校に通う学生たちは等しくこの就学生ビザを持つことになる。日本の正規の語学学校（日本語学校を指す）は293あり、その設立許可は文部科学省・法務省・外務省の三者が共同で設立した日本語教育振興協会が認定する。現在日本には３万3000人の就学生がいる。その多くは日本語学校での勉強を日本の大学入学のための第一歩と捉えている。ただし多くは勤労学生で、アルバイトと学業を兼ねているため、学生が授業をサボるケースや、十分学業を修められないケースも出てくる。このため日本語教育振興協会の日本語学校に対する管理は極めて厳しく、学生が学業を十分修められないケースや、とりわけ非合法でアルバイトに従事する例が頻発する場合には、その学校に管理強化を求め、悪質なケースでは教育資格を取り消されることになる。

日本の学校の学費・生活費はとても高く、通常私立大学に４年間通う経費は約400万円。公立大学でも260万円。そのため多くの私費留学生は自ずと生活費をアルバイトに頼ることになるが、これは学業にも相当悪影響を与えることとなる。このような状況を改善するため、日本政府は奨学金制度の限度額を高め、奨学金の対象範囲も拡大しつつ

ある。一部の学校では外国人留学生に対する学費減免制度が実施されており、成績優秀な学生には３０％の学費カットがあり、また国からは外国人留学生に対する８０％の医療補助もある。昨年から就学生も奨学金を申請できるようになり、国際善隣学院の場合、奨学金の対象の就学生は毎月５万2000円の助成が得られる。また日本では社会各方面からの企業や個人名義の奨学金制度の設立が認められており、トヨタ自動車の場合、日本国内の２５県で独自の奨学金制度を設けている。

沖縄県で記者を受け入れてくれたホストファミリーの小波津さんも奨学生募集業務に当たっている一人である。彼女は「朝日新聞」の宅配所に勤めている。「朝日新聞」は日本の三大新聞の一つで発行部数は約800万部である。朝日新聞社は３５年前に奨学金制度をスタートさせ、外国人留学生の配達員を募集し、新聞社は４年間で最高370万円、最低でも年間６０万円を給付する。有資格校となっている250余の大学・短大・専門学校の入学資格があり、しかも健康なら誰でも申請できることになっている。小波津さんの話によると新聞配達の仕事はきついが、留学生にとってその給付額は少なくないため、朝日奨学金を申請している中国人留学生はますます増えているとのことである。

初めての日本訪問ではあったが、駆け足で通り過ぎたこの国の印象は強烈であった。そして日本で道を切り開こうとするわが中国の学徒たちが厳しい生活条件を乗り越え、目標を達成することを望まずにはいられない。そして同時に彼らが中日両国民の間の友好の使者となることを。

日本式教育の独自性

本紙記者：陳　丹

2003年1月16日『科技日報』（第2面）

2002年12月1日から21日まで、記者は中国日本語教師訪日団に同行し、国際交流基金日本語国際センター、早稲田大学日本語国際センター、東京国際善隣学院、沖縄キリスト教短大、那覇市立上山中学等多くの教育機関を相次いで訪ね、数多くの日本の教員とさまざまな形で交流を行った。教育施設の見学や授業参観のみならず、記者は日本人の教員・学生と一対一で直接交流する機会を得、日本の教育制度や教育の現状について理解を深めた。

日本でも中国同様9年間の義務教育が実施され、6歳から15歳までの子供は必ず学校教育を受けることになっている。日本では15歳以上の識字率は99％に達し、中学校卒業者の96．8％は普通科または実業科の高校に進学する。高校卒業者の32．8％は大学に進学し、その他の学生も短大や技術系短大に進学するため、全体の大学入学率は50％にもなる。

日本の学校には公立と私立の2種類があり、通常、生徒たちは自宅付近の公立学校へ入学するが、私学はその管理が厳しいことから（親には）人気がある。日本の公立学校は普通、成績別クラス編成を一種の差別とみなし、優秀な生徒とそうでない生徒とでクラスを別にする方式を採らない。しかし利益優先の私学の場合、入学者は家庭の経済条件に恵まれ、学校の管理はかなり厳しく、成績別クラス編成のみならず、出来の悪い生徒には退学を求める場合もある。高校、大学だけでなくほとんどの私立中学校では入学希望者は試験を受けなければならず、英語や体育で特に優秀な生徒には優遇措置があることもあるが、芸術に優れていても下駄を履かせてもらうことは難しいという。

公立学校では受験者の英語や体育の成績を特に重視することはない。しかし一部の公立高校には推薦入学制度があり、推薦対象者の成績のみならず、課外活動の参加状況も重視する。学校側は、課外活動を通して学生の柔軟性や社会活動に参加する能力が読み取れると考えている。このため日本の公立学校では各種各様の課外活動があり、学生は各自希望する活動に参加する。

日本における教育理念も絶えず変化している。日本社会は「和」を重んじ、集団行動と対人関係での協調性を強調し、各人が周辺環境に相和すことを求めてきた。しかしこの伝統も現在の日本の若者の間では徐々に変化し、自己中心的な考え方は青年の間に広がりつつある。

前世紀の70年代から日本ではオープン方式の授業が推し進められ、学生本人の選択の尊重が強調され、全員が「一定の学習能力」を有することは求められなくなってきた。これに伴い、学習指導要領の教育内容も量的に減少し、「ゆとりの教育」が強調され、校内での体罰は厳禁とされ、教員が生徒に重い課題を与えしたり、公然の場で特定の生徒を批判したりすることにかなり厳しい監視の目が向くようになった。2002年4月からは日本の小中高校で学校週5日制が完全実施され、生徒の負担軽減と生徒による学習への

主体的取り組みが図られた。しかし日本滞在中記者が感じたのは、多くの教師がこの「ゆとりの教育」に賛同せず、むしろ結果的に学習意欲の無い子供を増やし、生徒の学力が低下し、校内ではいじめが絶えず、改革は明らかに失敗だったと考えていることである。

那覇市の市立上山中学で記者の注意を引いた出来事がある。それは二人の女生徒が廊下ですれ違う他の生徒に絶えずぺこぺこお辞儀と挨拶をし、一方お辞儀を受けた生徒はこの二人をまったく相手にせず、挨拶を受けた生徒もまるで聞こえないかのように何の反応も示さないのである。後でその二人に説明してもらって初めてわかったことだが、日本の学校では上級生と下級生の区別は厳格で、下級生は高学年の学生に対し、面識があるか否かに関わらず、必ず自分から挨拶をしなければならないそうで、お互いの学年の違いは着ている制服の色で見分けがつくという。これは日本の学校特有の現象と言っても良いのではなかろうか。

最後に日本の教師について触れておく。現在日本の小中学校教員はほぼ大卒で、一部短大卒がいる。日本には専門の師範学校は存在しない。かつては教育大学が教員育成の役割を担っていたが、今では消滅し、普通大学の教育学部に残るだけである。教育学以外の専攻者も教師の職に興味があれば教育学部の課程を選択でき、単位取得も可能である。また教育学部の学生であれ他学部の学生であれ、教師になるには国家試験を受験、合格して教員認定証を得なければならない。しかも教員の国家試験を受験するには選択した教育課程の一定単位を取得していることが必要条件なのである。試験合格後も各地域の教師の不足数に応じて選抜が行われ、最終的に合格者が決定される。現在日本では学齢期の児童数減少が深刻で、教師希望者の競争は激化の一途、加えて近年の不景気もあって政府は教師の給与削減を計画しており、日本では教師をするのもますます楽ではなくなっている。